

第三回 民話 ゆうわ座 一話に遊び 話を結び 座に集う—
いまここにも開いている民話の入口—『笠地蔵』を考える—

目 次

1. 「民話 ゆうわ座」とは	進行 小田嶋 利江	p.3
(記録 加藤 恵子)		
2. なぜ『笠地蔵』か? どんなお話だったか?	加藤 恵子	p.5
岩崎京子再話『かさこじそう』	読み語り 加藤 恵子	
(記録 加藤 恵子)		
3. みなさんと感想や意見の交換 1		p.10
(記録 島津 信子)		
4. 「再話」を考える	小田嶋 利江	P.14
瀬田貞二再話『かさこじそう』	読み語り 加藤 恵子	
(記録 山田 裕子)		
5. 伝承の語り手が語る「笠地蔵」の映像を見る	語り手紹介 小野 和子	p.22
『笠の観音さま』永浦誠喜さん(宮城県登米市南方町・明治四十二年～平成十四年)		
(記録 山田 裕子)		
6. 探訪者の目でとらえた「笠地蔵」の周辺—老夫婦・地蔵など—	話題提供 小野 和子	p.28
(記録 小野 津子)		
7. みなさんと感想や意見の交換 2		p.36
(記録 島津 信子)		

第三回 民話 ゆうわ座 各担当者

〈当日〉	司会進行	小田嶋 利江
	読み語り	加藤 恵子
	話題提供	小野 和子
	板書	瀬尾 夏美
	会場	小野 津子・島津 信子・白井 聡子・山田 裕子
	撮影・録音	小森 はるか・酒井 耕・長崎 由幹・福原 悠介・細谷 修平
	運営	清水 チナツ・鈴木 瑠理子
〈記録〉	文字起し作成	小野 津子・加藤 恵子・島津 信子・山田 裕子
	梗概作成	小田嶋 利江

* 担当者のうち、瀬尾・小森・酒井・長崎・細谷は一般社団法人 NOOK メンバー、
清水・鈴木はせんだいメディアテーク所属、福原は有限責任事業組合メディアストラータ所属、
その他はすべてみやぎ民話の会会員。

せんだいメディアテーク 考えるテーブル

第三回 民話 ゆうわ座 一話に遊び 話を結び 座に集う—
いまここにも開いている民話の入口—『笠地蔵』を考える—

○開会あいさつ

清水 チナツ (せんだいメディアテーク)

みなさん、こんにちは。今日は遠地から集まっていただきまして、ありがとうございます。
わたくし、せんだいメディアテークの清水と申します。今日は、朝方から雪がちらついたりとかしてどうなるかなあとと思ってたんですけども、今日は「民話ゆうわ座」で、「笠地蔵」を取り扱うことになってますので、寒い中、じっくりじっくりみなさんと三時間、これから場を開いていきたいと思います。
今日みなさんがお座りいただいているこの場所を、メディアテークは震災後に始めました。ここは「考えるテーブル」と言います。震災復興とか表現活動とか地域社会について、みなさんと膝を突き合わせて話していくなかで、お互い学び合いながら対話を通して進むべき道をとかをですね、一緒に考えていこうと震災以降に始まったプロジェクトです。

ここでは、市民協働団体の方たちがホストを務めて、みなさんと様々なテーマで対話をおこなってきたんですけども、今日は、みやぎ民話の会、「民話声の図書室」プロジェクトチームのみなさんが、協働団体として、この場を開いてくださいました。今から、「民話ゆうわ座」を始めてまいりたいと思います。

いくつか、ちょっと諸注意だけ、先にわたしの方からさせて頂きたいと思うんですが、これから三時間、出入り自由のイベントですので、ちょっと体が疲れたなとか、お手洗いきたいなあとというときには、エレベーターの脇の方にお手洗いがございます。是非ご自由に、自分の過ごしやすいように過ごしてください。それから、温かいコーヒーや紅茶などが、隣のカフェでテイクアウトで販売しておりますので、是非そちらでゆっくりコーヒーや紅茶などを飲みながら時間を過ごしていただければと思います。

あと、メディアテークの事業記録として、ビデオカメラと、それから写真で記録をさせて頂いております。個人が特定できない範囲で撮影する予定ではいるんですけども、なにか気にかかることなどありましたら、終わったあとでもかまいません、わたくし清水までお声掛けいただければと思います。
それでは、これからはみやぎ民話の会、「民話声の図書室」プロジェクトチームのみなさんに、バトンタッチして進めていきたいと思います。どうぞ、みなさんよろしく願います。(拍手)

記録 加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

1. 「民話 ゆうわ座」とは

司会進行 小田嶋 利江（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

みなさん、こんにちは。十二月二十七日という押し迫ったときに、みなさんにこんなに来ていただきまして、ほんとにうれしく思います。

とっても、今緊張していますので、なるべく肩の力を抜いて頑張りたいと思います。みなさんも、気楽にお付き合いいただければなあと思います。

本日、司会進行を務めます、みやぎ民話の会のわたくし小田嶋と申しますので、どうぞ三時間の長丁場になりますけれども、みなさん疲れないようにお付き合いいただければと思います。

【聞き、語り、考える】 今、メディアテークの清水さんからもご説明があったように、この場所はみなさんで民話の何か一つのテーマについて、聞いて、考えて、それから考えたことを語って、それをまた聞いて、またそれを考えて語って、そういうとってもみなさんが考えたことを自由に語っていただきたい。それをわたしたちも聞きたい。そういう場なんですね。ですから、これから二回ほどみなさんの感想や意見を自由に出していただく時間を設けますので、そのときに言いたいこと、感じたこと、そうしたことをどうぞ遠慮なく出していただきたいと思います。

【民話の深い森】 一回め、二回めにお出でいただいた方には、もうお話したことなんですけれども、今日のこの集いの名前から、ちょっと説明させていただきます。

この集いはですね、「民話ゆうわ座—話に遊び 輪を結び 座に集う—」という名前がついています。「民話」という言葉は、よく耳にするし、なんとなく分かっているような言葉なんですけれども、いろんな人によっていろんな意味に使われます。わたしたちが「民話」と言うときには、その言葉に込めているのは、ある特定のお話というか、物語のことです。

そのお話というのは、耳で聞かれて、それから口で語られて、さらにその人の口で語られたものが、また耳で聞かれてというように、次から次へと、人から人へと、口から耳へ耳から口へと語り継がれていく、そういう物語です。途中で文字に書かれたりすることもありますけれども、声を仲立ちとして、語り継がれていくような、声によって伝えられてきた物語といえると思います。

そうした民話の世界というのは、よく「深い森」に喩えられます。なぜなら、耳で聞かれ、口で語り継いで、伝えられてきた物語ですから、語り継いできた非常に多くの延々と何代も続いた、さまざまな人々の思いが、例えば、現実の苦しみだとか、得難い知恵だとか、深い思いや切ない願いなんかがそうしたものが、たくさんたくさん一つのお話に込められているのではないかと思います。そのためか、お話の種類もたくさんありますし、一つのお話についても、それぞれ一人一人の語り手で、それぞれの思いが込められていたりします。

【探訪者のまなざし】 わたしたちみやぎ民話の会というのは、山や海や町で暮らしている、そうした民話の語り手お一人お一人を探して、お訪ねして、その方に「どうぞお願いします」とお頼みして、そのお話を聞かせてもらいます。そして、聞かせてもらったお話を、自分たちで楽しんでいるのではちょっともったいないなということで、それをいろいろな形の記録として、みなさんにもお分けしたい、知ってもらいたいというような活動を続けてきました。

まあ、四十年ほどになるんですけども、そうした営みを採訪とよびます。採集の「採」に、訪問の「訪」ですね。それを、採訪とよんでいるんですけども、つまり採訪というのは、民話を聞き伝え、語り伝えている人々、日々の暮らしを生きてきた人々を一人一人お訪ねして、その暮らしの中でお話をお聞きして、その中で民話を聞かせていただく活動のことです。そうした、採訪の中で、目にし耳にするいろいろなことが、さまざまな民話のさまざまな顔、あるいはそこに語り込められてきた思いなどの、そうしたことをわたしたちに考えさせてくれる手がかりになります。

この「民話声の図書室」の「民話ゆうわ座」では、そうした採訪者として体験したこと、それをみなさんにお示しして、そこを手がかりとして民話のさまざまな顔だとか、そこに込められている深みだとか思いだとか、そういうことを皆さん一人一人に考えてもらい、感じてもらい、そして皆さんそれぞれが語っていただいて、それをわたしたちも聞いて、語り合いの中で、そうしたことを考えていきたいという場なんですね。

【話に遊び、輪を結び、座に集う】 改めて考えてみますと、そのように語り継いできた民話というものは、長い目でみると、この場所もですね、この聞いたり語ったりして伝えていくこと、その未来とか次の世代とかへ伝えられていく可能性の一つかもしれないと思うんですね。ですから、今日のこの場も、この集いも、そういう語り継がれてきたずっと長い流れの一番端っこにでも位置づけられたら、それは、すごくうれしいことだなと思って、そういう願いを込めまして、「話に遊び」、「輪を結び」、「座に集う」ということを盛り込んで「民話ゆうわ座」と名づけました。「遊び」「結ぶ」のゆうとお話、輪っかのわを取って「ゆうわ座」としています。そして、願わくば話を語ったり聞いたり考えたりすることで、ここに集まった皆さん、わたしたち全てが、なんらかの結びつきが生まれて、同じ一つの座に集うことができれば、それは素晴らしいことだなあと思って、それを願って「座」としてしています。

【「笠地蔵」を考える】 今回は、その第三回めになります。第一回は「かちかちやま」、第二回は「猿蟹合戦」を取り上げました。みんな皆さんがよく知っているお話です。

第一回めの「かちかちやま」では、我々が普通考えている「かちかちやま」とは全く違うような、いくつもの別の話が、実はくっついたり離れたりして、様々な「かちかちやま」のお話の姿を作っているんだということを考えてみました。

第二回めの「猿蟹合戦」のときには、やっぱり猿と蟹の争いの筋立てが、実はそれもたくさんの姿のお話があって、そこには、人間の暮らしの歴史をあるいは写しているのではないか、ということも考えてみました。

今回の第三回はですね、「笠地蔵を考える」と題しまして、やはり皆さんが教科書や絵本でよく知られている、知っていらっしゃる民話「笠地蔵」のお話を取り上げます。前の2回は、動物たちの話でしたね。今回はですね、人の世界の話になります。それも、日本の昔話には、たくさん出てきます、おじいさんとおばあさんが中心となるお話です。

そこで、まず、このテーマの提案者である加藤恵子さんに、なぜ「笠地蔵」を取り上げたいと思ったかを簡単にお話してもらいます。よろしくお願ひします。

記録 加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

2. なぜ『笠地蔵』か？ どんなお話だったか？

加藤 恵子（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

みなさま、こんにちは。わたしは、みやぎ民話の会の加藤恵子と申します。

皆さん、ここに教科書があるんですけども、岩崎京子さんが書かれた「かさこじぞう」が、昭和五十七年からもう三十八年間もずっと教科書に教材として、小学校の一年生、二年生の子どもたちが教室で読み続けているんです。もしかして、この中で、教室でこの「かさこじぞう」を読んだよという人はいらっしゃいますか。たぶん四十代前の方だと思うのですが…あっいらっしゃいましたね。何人かいらっしゃいました。あとで、ぜひ思い出を聞かせていただきたいんですけども…。

【「かさこじぞう」と子どもたち】 わたしは、教師を退職した後、同僚の先生の教室で、語りのおばちゃんということで、ときどき昔話や伝説を語っているのです。そのご縁で昨年、二〇一四年の一月に、仙台市の八本松小学校で、小学校二年生がこの岩崎京子さんの「かさこじぞう」を勉強しているところを見せていただいたんです。

そのときですね、実に子どもたちがいきいきとこの「かさこじぞう」を読んだ感想、そして気になることを出し合って、話し合おうという授業だったので、いろんな考え方や意見が出て、とてもおもしろかったんですね。

【じいさんばあさんのやさしさ】 ちょっとそのとき子どもたちが、どんな感想や話し合いをしたかを簡単にお話しますとね、まず、子どもたちはみんな、じいさまやばあさまが優しい、優しいじいさまだな、いい話だなあって言っているんですね。

でも、だんだん話し合いが深まってくると、じいさまが自分の手ぬぐいをかぶせてあげたり、雪をとってあげたりしたことが優しいんだって言う子や、いやいや笠をかぶせた場面が、じいさまの一番優しいところが出ているから、わたしは、そこが大好きだという女の子もいました。

それから、嫌な顔ひとつしないばあさまって、ほんとに優しいんじゃない、このばあさますごいと言う子どももいて、ほんとに子どもってこのように率直に受け止めたことを言葉にして出していると思ったんですね。

【貧しい暮らし】 その中で、貧乏な暮らしってということについて、やっぱり今の子どもたちは貧乏はかわいそうだと。誰も振り向いてくれないのはかわいそうだと。なんで笠こ売っているときに、誰も振り向いてくれないのかなって、ほんとに素朴な疑問を出していました。

それから、貧乏でやっと思売りにいけるものを、お地蔵さまにあげる決意がすごかってそう言う子どもがいて、「この二人は、とっても仲のいい夫婦だ」って、そんなことを言う子もいて、それを聞いていた子どもが「最初は貧乏だったのに、最後には食べ物とか貰えたからうれしかったと思う。手ぬぐいをあげたのがすごい。風邪ひかなくて良かったなあ」って思うと、とっても優しい思いを書いています。あとね、ほんとに心配して、「笠こは売り物って書いてあったんだけど、かぶせて大丈夫だったのかなあ」と心配して書いている子どももいました。

地蔵さまについても、子どもたちは、「笠こ地蔵は、とてもうれしかったと思う、だからいろんなものを持ってきて優しい地蔵さまでよかったな」と。

【よいことをすると、よいお返しがある】 それから、これは、わたしもすごいと思ったんですが、「安心して家に帰ったじいさまが、ばあさまががっかりすると思ったら、喜んで良いことをしたねって言ったのはね、地蔵さまがお返しをしてくれるって信じていたからだ、ほんとに良いことをしたんだと思う。わたしもそういう

のをやってみたいな」っていうとっても子どもらしい思いを書いているんですね。

これは、このあとの話し合いできっと出てくると思うんですけど、「じさまの家はどこだ。ばさまの家はどこだって、夜に聞こえてくる声を聞いたときに、なんか嫌な気持ちでした」って。やっぱり怖いっていうイメージを子どもたちが持ったんだなあと感じました。

そして、一番子どもたちが子どもらしいなあと思ったのが、「僕も囲炉裏で暖まってみたいなあ、笠が五こしかなかったけど、もう一つかぶせてあげられるものがあったよよかった、僕もお地蔵さんに笠を掛けてあげて、楽しい日を過ごしたい」って、こんなふうには書いているところですね。

それから、「良いことをして、良いことが戻ってきた。そういうことをやってみたいなあ」って、こんなふうな子もいました。また、「わたしも笠を買いに行ってみよう」と思った子もいたし、「良いことをしたら、その分良いことが返ってくる。優しい二人を見習いたいなあ、それから、地蔵さまがお返しをするなんて、ほんとにあったらとても良いなあ」って、ほんとに地蔵さまが持ってきてくれたことを子どもたちは、素直に受け止めているんですね。

【不思議に思ったこと】 なかに、不思議だとかもっと知りたいという意見もあって、今の子どもは、アイパッドとかで、笠地蔵とか読んでいるんですね。「アイパッドで見たときと違うところがある。教科書の絵には町の様子が描いていない、それから、教科書の絵には、お地蔵さまに氷柱が下がっているって書いてあるのに、絵には描いてない。氷柱は、どこにできんのかなあ」って。ほんとに氷柱なんて見たことのない子どもたちなんですね。八本松という仙台の南の町の中の学校なのでそうだろうなあと思います。「これは、昔の人が作った話だから、ちがう笠地蔵もあるんだってよ」って、知ってるよっていう顔で言った子もいました。

わたしが一番そうかと思ったのは、「じいさまとばあさま、どうやって暮らしているのかなあ」って。不思議だなと思ったことを出してくれたんですね。

【あらためて「笠地蔵」を考えたい】 わたしはこの授業を見て、わたしが教師時代に、こういう授業を子どもたちとやっていたんだろうか。記憶にあんまり残ってないということは、ちゃんとやってなかったんだと強く思いました。八本松小の子どもたちのように「かさこじぞう」の感想を真剣に出し合って理解を深めていることを思うと、私自身の「かさこじぞう」の認識を振り返りたいと思いました。

子どもたちのこのような感想や疑問をもとにしながら、この「ゆうわ座」で「笠地蔵」について考えてみたいと思って、今年の春、「笠地蔵」をやりたいとみんなに提案しました。子どもたちが受け止めた、「かさこじぞう」をもとにして、今日はみなさんと一緒に「笠地蔵」の話は、ほんとにどんなことを伝えたくて語り継がれてきたのかということ、みなさんとじっくり考えてみたいと思いました。

それと、今日は十二月二十七日。明日は二十八日、餅つきの日ですね。ちょうど時期もいいなと思い、こんな忙しい時期ではありますが、こんなにみなさんに来ていただきました。みなさんとじっくり考えてみたいと思いました。わたしの話を終わります。

小田嶋 — ありがとうございます。

というわけで、「笠地蔵」について、みなさんと考えてみたいのですが、まずですね、「笠地蔵」っていったいどういう話だったのか、今一度、みなさんと一緒になって、ちょっと眺めてみたいなあと思います。ですから、今出てきました岩崎京子さん再話の「かさこじぞう」を、加藤恵子さんに読んでいただきますので、ちょっと聞いてみてください。

加藤 — 皆さんの前で読むのはとてもなんか緊張しますが、わたしなりに教室の子どもたちに読むように読ませていただきます。座って読みます。むこうに、絵本と同じ映像を写していますので、むこうの絵を見な

がら聞いてください。

岩崎京子再話『かさこじぞう』[1967 プラ社刊 絵 岩井五郎]

読み語り 加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

かさこじぞう

むかし むかし、ある ところに、じいさまと ばあさまが ありましたと。

たいそう びんぼうで、その 目 その 目を やっと くらして おりました。

ある としのおおみそか、じいさまは ためいきを ついて いいました。

「ああ、その へんまで おしょうがつさんが ござらっしゃると いうに、もちこの よういも できんのう。」

「ほんにのう。」

「なんぞ、うる もんでも あれば ええがのう。」

じいさまは、ざしきを みまわしたけど、なんにも ありません。

「ほんに、なんにも ありやせんこのう。」

ばあさまは、どまの ほうを みました。すると、なつの あいだに かりとって おいた すげが つんで ありました。

「じいさま じいさま、かさこ こさえて、まちさ うりに いったら、もちこ かえんかのう」

「おお おお、それが ええ、そう しよう」

そこで、じいさまと ばあさまは どまに おり、ざんざら、すげを そろえました。そして、せっせと すげがさを あみしました。

かさが 五つ できると、じいさまは それを しょって、

「かえりには、もちこ かって くるで。にんじん ごんぼも しょって くるこのう。」

と いうて、でかけました。

まちには おおどしの いちが たって いて、しょうがつがいもんの 人で おおにぎわいでした。

うすや きねを うる みせも あれば、山から まつを きって きて、うっている 人も いました。

「ええ、まつは いらんか。おかざりの まつは いらんか。」

じいさまも、こえを はりあげました。

「ええ、かさや かさやあ。かさこは いらんか。」

けれども、だれも、ふりむいて くれません。しかたなく、じいさまは かえる ことに しました。

「としこしの 目に、かさこなんか かうもんはおらんのじゃろ。ああ、もちこも もたんで かえれば、ばあさまは がっかりするじゃろうこのう。」

いつのまにか、目も くれかけました。

じいさまは、とんぼり とんぼり まちを でて、むらの はずれの のっばらまで きました。

かぜが でて きて、ひどい ふぶきに なりました。

ふと かおをあげると、みちばたに じぞうさまが 六にん たって いました。

おどろは なし、木の かげも なし、ふきっさらしの のっばらな もんで、じぞうさまは かたがわだけ ゆきに うもれているのでした。

「おお、おきのどくにな。さぞ つめたかろこのう。」

じいさまは、じぞうさまのおつむの ゆきを かきおとしました。

「こっこの じぞうさまは、ほおべたに しみを こさえて。それから、この じぞうさまは どうじゃ。はなから つららを さげて ござらっしゃる。」

じいさまは、ぬれて つめたい じぞうさまの、かたやら せなやらを なでました。

「そうじゃ。この かさこを かぶって ください。」

じいさまは、うりものの かさを じぞうさまにかぶせると、かぜで とばぬよう、しっかり あごのところで むすんで あげました。

ところが、じぞうさまの かずは 六にん、かさこは 五つ。どうしても たりません。

「おらので わりいが、こらえて ください。」

じいさまは、じぶんの つぎはぎの てぬぐいを とると、いちばん しまいの じぞうさまにかぶせました。

「これで ええ、これで ええ。」

そこで、やっと あんしんして、うちに かえりました。

「ばあさま ばあさま、いま かえった。」

「おお おお、じいさまかい。さぞ つめたかったろうの。かさこは うれたのかね。」

「それが さっぱり うれんでのう。」

じいさまは、とちゅうまで くと、じぞうさまが ゆきに うもれていた はなしをして、

「それで おら、かさこ かぶせて きた。」

と いいました。

すると、ばあさまは いやな かお ひとつ しないで、

「おお、それは ええ ことを しなすった。じぞうさまも、この ゆきじゃ さぞ つめたかろうもん。さあ さあ、じいさま、いろりに きて あたって ください。」

じいさまは、いろりの うえにかぶさるようにして、ひえた からだを あたためました。

「やれ やれ、とうとう もちこ なしの としこしだ。そんなら ひとつ、もちつきの まねごとでも しようかのう。」

じいさまは、

こめの もちこ

ひとうす ぱったら

と、いろりの ふちを たたきました。すると、ばあさまも ほほと わらって、

あわの もちこ

ひとうす ぱったら

と、あいどりの まねを しました。

それから ふたりは、つけな かみ かみ、おゆを のんで やすみました。

すると まよなかごろ、ゆきの なかを、

じょいやさ じょいやさ

と、そりを ひく かけごえが して きました。

「ばあさま、いまごろ だれじゃろ。ちょうじゃどんの わかいしゅが しょうがつがいもんを しのこして、いまごろ ひいて きたんじゃろうか。」

ところが、そりを ひく かけごえは、ちょうじゃどんの やしきの ほうには いかず、こっちに ちかづいて きました。

みみを すまして きいて みると、

六人の じぞうさ
かさこ とって かぶせた
じさまの ちは どこだ
ばさまの ちは どこだ

*とうたっているのです。

そして、じいさまの ちの まえで とまると、なにやら おもい ものを、
ずっさん ずっさん

と おろして きました。

じいさまと ばあさまが おきて いて、あまどを くと、かさこを かぶった じぞうさまと、てぬぐいを かぶった じぞうさまが、

じょいやさ じょいやさ

と、からぞりを ひいて、かえって いく ところでした。

のきしたには、こめの もち、あわの もちの たわらが、おいて ありました。

その ほかにも、みそだる、にんじん、ごんぼや だいこんの かます、おかざりの まつなどが ありました。

じいさまと ばあさまは、よい おしょうがつを むかえる ことが できましたと。

注記 *～は、教科書に掲載された初期の再話では以下のようになっている。

*と歌ってきます。じいさまが、思わず、

「ここだ、ここだ」

と大声でしたら、歌声はぴったり止まりました。

そして、何やら、おもい ものを、

ずっさん ずっさん

と 下ろす 音が しました。

記録 加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

3. みなさんと感想や意見の交換 1

参加者のみなさん

小田嶋—今、「かさこじぞう」を読んでいただきました。これは、みなさんが教科書や絵本でよく知っているらっしゃる「笠地蔵」のお話なのですが、今、お話を聞いて、あるいは前に教科書なんかで読んだりして、絵本で読んだりして、この「笠地蔵」というお話について、たとえば、好きだとか、嫌いだとか、こんなところがいいなとか、どんな風にみなさんがこのお話を考えていらっしゃるか、ちょっとそのなんでもいいので、意見とか感想などありましたら、自由に出していただけないかなと思うのですが、いかがでしょうか。お好きな方、あるいは、ちょっとこの辺わかんないとか、変だなと思うとか、何かありませんか。

参加者 A (女性)—先ほどの小学生の話にもあったんですけど、笠が一つ足りないって、自分の手ぬぐいをとってしまうところまで、お地蔵さんにしてあげるおじいさんの気持ちが、ずっと子どもの頃から不思議でした。

小田嶋—ありがとうございます。あの、つまり、そんなにまでしてお地蔵さんに愛情を注ぐというか、その地蔵さんのためにそこまでしてあげるっていうのはどうしてなんだろうっていうことかしら。

参加者 A—はい。

小田嶋—たしかにそうですね。ありがとうございます。あの、私もそう思うとか、あるいはもっと違う考えとか、他にも意見がありましたら、いかがでしょうか。

参加者 B (女性)—私というよりも、今、大学生、二十二歳になる娘に、小学二年生のときの笠地蔵を覚えているかという話をしたときに、「覚えている」って即答だったんですね。「へえ」と思っていたんですけど、「どんなところが一番」って聞いたときに、「その時に、やっぱりまだ子どもだったんで、自分はクリスマスのプレゼントをたくさんもらった。でも、おじいちゃんおばあちゃんもたくさんプレゼントをお地蔵さんからいただいて良かったなあと思ったのがその時の気持ちだ」と娘が言っていました。

小田嶋—そうですね。ありがとうございます。とつてもよくわかります。つまり、お地蔵さんからプレゼントがもらえたことが、とつても良かったなあと思ったっていうことですね。自分の身に引き比べてそう、娘さんは思われたということですね。

参加者 B—ええ、二年生ながら、そんなような感想を持ったっていうことを、今、話をしてくれました。

小田嶋—なるほど、わかります。ありがとうございました。あと、ほかに何かありましたら。

参加者 C (女性)—私、去年でしたか、民話の会で、地域の2年生の子どもの国語の「かさこじぞう」それ

を、やって欲しいって言われてね、行って、そこでお話したことがあるんです。その後でね、感想文を寄せてよこしたんです。そしたら、「家へ行ってこの話をしたら、おじいちゃんに『かさこ、五つも一晩でできっかや』って言われた」っていうんです。それで、「『寝ないで一晩かかってしたって、二人して、スゲ笠、五つも作れっぺが』って言われたんです」っていうことを聞かされてね。私なんかは、そういうことしたことないから、あんまり不思議でなかったんですけども、実際にしてみたおじいちゃんからすると、無理じゃないかって言われたっていうことで、その文章に書いてあったんです。

小田嶋—なるほど、すごくよくわかります。そのおじいちゃんは笠を作ったことがあるんですね、きつとね。

参加者 C—してるんですね、草履とか。

小田嶋—ちゃんと暮らしてきた方がそういうふう感じられたということなんですね。いいご意見、ありがとうございます。あと、何かありませんか。

参加者 D (男性)—この笠地蔵の話は、子どもの頃、母に聞いたのか、学校で習ったのか、よくわからないんですけども、その時はいい話だなと確かに思ってたんです。ただ、大学生のころとか、あるいは、自分が子どもを持つようになった時に、どこか、もの悲しい感じがするんですね。全体、幸せな感じがしてる、流れてるんだけども。そういうふうな感じが流れてる、それが何かなくなってということが非常に気になって、専門で研究するようになったんですけども。やっぱりちょっと、子どもには夢を与えますけども、大人にとっては、なんかその苦勞している場面に共感する気がする。物語がね。あの、捉え方が変わるんじゃないかと。ちょっと受け入れが変わりました。

小田嶋—ありがとうございます。つまり子どもの時に感じた、その、幸せが来たというお話が、大人になると、なんか悲しい感じがした。ああ、それは貴重なご意見、ありがとうございます。とっても大事なことのような気がします。あと他にありませんか。

参加者 C—あ、すみません、何度も。貧乏っていうことがね。幸せというふうな言葉とどのようにつながるのかと思って、このおじいちゃん、おばあちゃんは、貧乏っていうことを悲しんではないんですね。私は、それを頭の中にずっとあってっから、この間、「世界で一番貧乏な大統領」っていう本を読んだんですけども、あれを見てね、人間の幸せというのは、貧乏だから不幸せだとか、そういうことではなくってその人達の価値観なんだと思うんですね。だから、子ども達にいきなり、貧乏だからかわいそうなんだっていうふう押しつけるっていうことは、大変間違いじゃないかと思うんです。むしろね、そのおじいちゃん、おばあちゃんは、貧乏だけでも、二人で仲良く、それなりに楽しんで生活をしている。お金とか、物とかということにこだわらない。しかし、そこで私も考えたんですけどね、幸せとか何とかっていうことは大人が考えることなんだ。それで、なんですか、人間の幸せ感っていうのは、いったいどういうことなんだろう。それを、ちょっと、いろいろ、みんなで話してみたことがあるんですけどもね。人間、究極の願いついていうのはね、結局は祈りなんですよね。救いなんです。だから、その救いがあるって、その救いで満足できるおじいちゃん、おばあちゃんたちの価値観っていうのが、とてもすばらしいというふう捉えたらこの文章、この話は生き生きとしてくると思うんですね。だから、先生達の、大人の読み深めっていうんですか、子どもの考えと合うところでぴたっと止めて、それで終わり

ではちょっと足りないんじゃないかなと思うんです。深められてなくて、そう思いました。

小田嶋—ありがとうございます。岩崎京子さんのお話でも、餅つきのまねをして楽しそうにしたりもするし、最後のお地蔵さまが運んでくるところ、折りという言い方はたしかに何か、つながるものがあるような気がしますね。ありがとうございます。あと、ぜひ言っておきたい方はおられますか。

参加者 E (男性)—あの、ここに来る前に一週間か二週間くらい前だったと思いますが、「仙台っこ」という雑誌の中に、この話があって、ずいぶん、今日の岩崎さんの話とは違うような気がするんですが。それで、僕もいろいろ考えたんだけど、結局、この民話の会にいらっしゃる方も先生が多いみたいだけど、これ、説教なんだよね、考えてみたら。説教なんです。非常に、あの、僕は、教えるっていうことがね、さっきから話になってるけど、そんなに大したものじゃないんじゃないかと、そういうふう思うんです。それで、あの、僕が読んだ話はちょっと違って、その、笠の数も違うし、んで、最後の手ぬぐいの話も違うんだね。おもしろいですね。これはふんどしになってるんですよ。そういうことがあるかなあと、僕は思うんだけどね。

それと、あの、スゲってなってるけど、これ、餅が出てきたからよけいわかったんだけど、日本の昔からの食事っていうの、それでもってるの米だったっていうことがわかるんです。それをずーっと受けついている気がするんです。それ、素晴らしいことだと思うんです。登米市にしても、米ですよ。これはいろんなところで米がつながっている。スゲじゃなくて、僕はワラだと解釈してやってきたんです。今日。

で、まあ、他にもいろいろ言いたいんだけど、あの、今日、僕、紹介したいなと思ったのは、『遠野物語』（柳田国男『遠野物語』1910）の九十九番に、あの、北川福二っていう男の人が出てくるんだけどね、その津波にあった話なんです。探してたの、僕、一生懸命に遠野物語を読んでね、なんかあるんじゃないかと思って。そしたら、あるんですよ。だけど、この扱い方がすごいんです。津波のこと、そんなに言ってないんですよ。

それともう一つは、「稲むらの火」っていうのご存じですか。ええと、八十歳くらいの方だったら、昭和十二年から、昭和二十二年まで やっぱり、国語読本にあったらしくって、僕もあの、ちょっとあの、和歌山の有田郡の広川の広ってところらしいんだけど、そこで実際にあった話を、まあ、民話かなんかわかんないけど、話にしたらしいですね。まあ、そういう稲に関して、それもすごいなあとわたしは思いました。実際にはね、その「稲むらの館」っていうね、博物館ができてるんですよ。その館長さんがいろんな資料をまあ、ちょっとだけ送ってくださって知ったんだけど、実際にはね、その稲むらっていうのはススキっていうんだそうですよ。で、僕はね、そのススキの方が本当は正しいんじゃないかと思うんです。実際に…

小田嶋—ちょっとよろしいですか。ちょっと前に戻させていただきたいのですが、さきほどおっしゃった「仙台っこ」のお話は、私も民話の会で載せているものなんです。で、その伝承の語りとしての笠地蔵が（絵本や教科書の話とは）違ったものだというのは、後から皆さんと話し合いたいと思いますので、その時に、どうぞ、ご意見いただければなと思います。一つ出させていただいて重要なことは、教訓的なにおいがするという、このお話は。

参加者 E—おいでなく、実際にですね。載っているわけだから、〈教科書〉に…

小田嶋—実際に。いいことをすれば、いいことが返ってくるよという…

参加者 E—それはあの、仏教で因果応報という、ね。

小田嶋—それを誘導するようなお話だと感じたということですね。

参加者 E—まあ、そうですね。

小田嶋—伝承の語りとは違うんだということ。それから、お米の話が出てきましたけれども、米は、日本文化の中でとっても大切な物ですが、土地によっては、大切なんだけど、作りたいんだけど、どうしても米ができないというところもやっぱりあります。で、ワラがとれないからスゲとかカヤとか、そうした物でいろんな物を作っているところもあるので、そうしたことも、もしこれから話し合いできればなと思いますので、その時よろしく願いいたします。

参加者 E—もう一つだけいいですか。お地蔵さんがなんでできてるかって。なぜ、お地蔵さんがこんな道ばたに立っているかって、考えました。これ、誰の身代わりですかね。

小田嶋—そのことも、やっぱりこれから話し合っていきたいなと思いますので。お地蔵さんにどんな思いが込められていたのかについても、さらに進めていきたいと思います。

参加者 E—はい。

小田嶋—一応この辺りでこれを切らせていただきたいと思いますので…

記録 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

4. 「再話」を考える

小田嶋 利江 (みやぎ民話の会 「民話声の図書室」プロジェクトチーム)

一応このあたりでこれを切らせていただいて、ここでちょっと話の方向性を変えたいと思います。

【「再話」としての民話】 加藤恵子さんに読んでいただいた岩崎京子さんの「かさこじぞう」は、今出していたいただいた伝承の語りそのままとはちょっと違うんですけども、どちらも同じ「笠地蔵」のおはなしです。こうした形のおはなしを「再話^{さいわ}」、「再び話すはなし」という意味で「再話」と言っています。

【声によって伝えられてきた民話】 民話ってというのは、口から耳へ、耳から口へと語り伝えてきたと言いましたように、もともとは聞き手と語り手が向かい合った場所で、人と人が向かい合って声の語りによって伝えられてきたものですよね。

「ゆうわ座」にいらっしゃっているみなさんのなかには、昔話の語りや子どもたちへの読み聞かせをやっている方もたくさんいらっしゃると思うんですね。そういうみなさんというのは、声の語りによっておはなしを伝えようとしている、とってもたいせつなことをなさっている方々、活動をされている方々だと思います。

そうした話を語っているひとりひとりが、ある特定の民話と出会って、「ああ、このおはなし、とっても好きだな」とか、「このおはなし、なんだかよくわからないけれど、なんだか気にかかるな」とか、「このおはなし、どうしても好きになれないんだけど、なんか胸が痛いんだよね」とか、忘れられない話との出会いというのが、やっぱりみなさんあったんじゃないでしょうか。

おひとりおひとりの体験とか思いとか、そしてさらにいえば考え方や生き方とか、そうしたものによって出会うおはなしはさまざまでしょうし、同じおはなしであってもその出会いの在り方は、それこそさまざまだと思います。そうした忘れられない話にみなさんが出会ったときに、やはりそのおはなしを誰かに伝えてみたくなるんじゃないでしょうか。そんなふうにして、たぶんおはなしは延々として、わたしたちのところで受け渡されてきたんじゃないかと思います。

【わが身をくぐらせて声や文字で語る】 わたしたちの先祖たちは、その受け渡しを、主に声の語りによって繋いできたんですけども、それを文字の形によって語ろうとすることもできるわけですね。どちらにしろ、聞いたおはなしを、わたしという身、我が身としての身に受け入れて、わたしの身になじませて、再び誰かにわたしの声とか文字によって語ろうとする、言葉で語ろうとすること、それが再話だと思います。

現在、もっぱら文字で語ることを主に再話と呼びならわしておりますけども、本質的には同じ営みなのではないかなとわたしは考えます。受け取ったもともとのおはなしを壊してしまうのではなくて、わたしのなかでたいせつにあたためたり、噛み砕いたり、まじまじと眺めたりして、わたしの身に落ち着いたところで、わたしの身から生まれてくる声や文字の言葉で語ること、それを再話と呼びたいと思います。

【再話のさまざまな姿】 そのようにわたしの身を通して受け取ったおはなしを、再び声や文字で語ることといえば、再話という営みはじつにさまざまな姿をとるんじゃないかなあとと思います。

ひとりひとりにさまざまなおはなしとの出会いがあれば、そのおはなしという入れ物に盛りたい思いもさまざまです。大袈裟に言えば、語り手の経験とか考え方や、それとどこかで重なったり繋がったりす

るのではないのでしょうか。また、主にどんな聞き手に語るかによっても、どんな場で語るかによっても、語りは変わってきますよね。みなさん、経験済みではないかと思います。小さい子どもに語るのか、大人の人たちに向かって語るのかで…

その再話について、さまざまな姿があるんですが、三つほど考えてみたいと思います。

【聞いた話にできるだけ寄り添って語る】 まずひとつは、各地域で実際に口伝えに語り伝えられてきたもとの民話は、その土地の言葉とか語り口で伝えられてきました。それはその土地の伝承の豊かさそのものなんですけれども、ほかの地域の人や後の時代の人には、そのままでは語りとしては、ずっと入っていかないことがあります。また、語られたものというのは、話の順番が入れ替わったり、繰り返したり、欠けていたり、いろいろするんで、語り口を少し整理したり、その土地でしかわからない言葉を別の言葉に置き換えたり、順番をちょっと変えてみたり、そういうふうにして、おはなしそのものの筋立てはそのまま、語り表現の面白さや息遣いなどはできるだけ語りに沿うようにして、心を砕いて再話をします。これがひとつのあり方です。

【聞いた話を自分の言葉で語る】 もうひとつ次に考えられるのは、受け取ったおはなしを、わたしというたったひとりのわたしの身に落とし込んでというんでしょうか、筋立てや真髓と考えられることをそのままにして、わたしの身から生まれてくる言葉と表現によって語ることもあります。自分の土地の言葉とか、自分の語彙とか…

忘れられないおはなしと出会うことで、ぜひこのおはなしをわたしの言葉で語ってみたいと思うことがあります。その場合、声や文字で語られたおはなしは、わたしという身に刻まれているというんでしょうか、そこにどうしてもついているおはなしへの理解とか、思いとか、それを自然と映すものとしてあらわれてきます。我々が教科書や絵本でみる再話としての民話は、多くはこうした意味の再話作品になります。先程読んでいただいた岩崎京子さんの「かさこじぞう」もそうですし、後から読んでいただきます瀬田貞二さんや松谷みよ子さんもそうです。ただ、たどってくるその身が違っていると、そこに刻まれているそのおはなしへの思いや考え方が少しずつ違って、少しずつ違った姿になって語られることになります。

【話の真髓を自分なりに見出して語る】 あともうひとつ。もう少し進んで、ひとつのはなしからそのなかの筋立てだとか、そこに籠められた思いとか問いかけだとか、聞いた人がそれを読み取って、自分の中で問題をあたらしく展開させて、新しいはなしの語りとして表現することも再話と呼ばれます。簡単な筋だけのはなしに、各地の同じはなしの筋を参考にして膨らませたり、断片のようないくつかの伝説を組み合わせると本来の伝説と思われる形をつくって息を吹き込んだり、そうしたことも再話と呼ばれます。

ですから、最後の再話は、作家の創作活動とともに近いものになってきて、見分けがつかないこともありえますけれども、そしてその人その人の考え方によってその境界は決められませんが、質的には違うものだと考えております。

こんなふうに再話というのはさまざまな姿をとって、再話する人によってさまざまな形が出てきます。先程の岩崎京子さんの「かさこじぞう」のはなしとはまた違った人の再話、違った姿としてあらわれてくる「笠地蔵」のおはなしを、また加藤恵子さんに読んでいただきたいと思います。瀬田貞二さんのおはなしです。

かさじぞう

むかし、あるところに、びんぼうな じいさんと ばあさんと あったと。
じいさんは、まいにち、あみがさを こしらえては、まちに いって、それを うって、くらしていたと。
あるとし、おおみそかが きたので、じいさんは、
「ばあさん、ばあさん。きょうは、おれ、かさを ^{いっ}五つも こしらえたから、まちへ いって、しょうがつ
の
もち かってくる。ことしこさ、いいとしをとるべな」
という、ばあさんも、
「はいはい。じゃあ、ひいたいて、まってるから」
という、じいさんが、でかけていったと。

さて、まちへ きて、じいさんは、
「かさや、かさや。かさは いらぬか」
こういって、かみちょうから しもちょうへ、しもちょうから かみちょうへ、いくどもあるいた。
けれども、だれひとり かうものがない。にぎやかな としこしいちでは、さかなや こめは とぶように
うれても、じいさんの かसानんか、みむきもされなかったと。

そのうちに ひがくれて、ゆきが もかもか ふってきたので、じいさんは しかたなく、かさを せおっ
て、もどってきた。
とちゅうの ひろい のはらに さしかかった ころには とうとう ふぶきになった。
のはらには、いしの じぞうさまたちが、たっているばかり。みれば ふぶきに さらされて、かおから
つららを たらして ならんでいたの、

「あやあ、むごいことだなあ。はだかで ゆき かぶって さぞ さむかろう」
と、じいさんは、うりものの かさを、じゅんじゅんに、じぞうさまに、かぶせると、六にんの じぞう
さまなので、ひとつたりない。
そこで、さいごの じぞうさまには、じぶんの かぶっていた かさを ぬいでかぶせて、そのまま うちへ
かえったと。

うちでは、ばあさんが、もちを かってくるだろうと まっていたが、じいさんは じぶんの かさまで
なくして、まっしろになって かえってきた。そして、じいさんが、かさは うれなくて、六じぞうさま
に かぶせてきたと、すっかり はなしをすると、
「そうか、そうか。かさを もってきたって、こんやの たしには ならないもの。おじぞうさまに あげ
て よかったな。そならば、つけものででも としをとるべ」
と、ばあさんが いって、ふたりして、すっぽりめしを さくさく たべて ねてしまったと。

すると、しょうがつの あさの あげがたに、どこかで、
「よういさ、よういさ、よういさな」
と、そりひきの こえがする。じいさんと ばあさんは めを さまして、がんじつの あさに、そりひきを
するのは ふしぎだな、と おもって きいていると、
「よういさ、よういさ、よういさな」
と、かけごえは だんだん、うちのほうへ ちかよってくる。

はてな、そりひきは、おらうちの ほうへ きたようだと、おきてみる と、かけごえが もっと おおき
くなって、

「よういさ、よういさ、
よういさな。

六だいじぞうさ、

かさとして かぶせた、
じいあ うちは どこだ、
ばああ うちは どこだ
よういさ、よういさ、
よういさな」

ときこえてくる。じいさんは、おもわず、

「おお、ここだ、ここだ」

と、こえをかけて、がらりと あまどを あけてみた。

すると、そこらじゅうは、あかるく かがやいて、六にんの あみがさを かぶった ひとたちが、
「よういさ、よういさ、どっこいしょ」
と、なにやら おもい たわらを、のきばたに おろして、のっこのっこと かえっていったと。

じいさんと ばあさんが、たわらを みたれば、しょうがつの もちやら さかなやら、いえに かざる
たからやら、こがねやらが、どっさり つまって、かぞえきれないくらい あったのだったと。

それから ふたりは、しあわせになったとき。

どっとはらい

小田嶋—ありがとうございました。先程語っていただいた岩崎京子さんの「かさこじぞう」。それから、
いま語っていただいた瀬田貞二さんの「かさじぞう」。その筋立ては全く同じですよ。でも、その語
り口というのか細かな表現というのか、そうしたことが語る方によって少しずつ違った姿を見せている
んだなあというのを感じていただけたのではないかと思うんです。

ひとつずつ見ていただきたいんですが、こちらにメディアテークに出していただきましたけれども、
はなしの筋の展開に従ってだいじなところだけを抜き出していただきました。このピンクの一番っ

うのは岩崎京子さんの再話の語りです。緑の二番のところが瀬田貞二さんの再話の語りです。

最初の昔話の語り出しのとっても特徴的な、いつも出てくるところですけども、岩崎京子さんは、

《1：岩崎京子再話　　2：瀬田貞二再話　》

【一】 1. むかしむかし、あるところに、じいさまとばあさまが ありましたと。たいそう びんぼうで、その日その日を やっとくらししておりました。

「びんぼうだ」ということが出てくるんですけども、瀬田さんのところも、

【一】 2. むかし、あるところに、びんぼうなじいさんと ばあさんと あったと。

ここではどこが違うのかまだよくわからないような気がします、その次に続けてですね、岩崎京子さんは、もうお正月さんが来てもなにも用意する手立てがないからどうしようかと考えて、「あっ、そうだ。かさでもこしらえて」ってなるんですね。

【二】 1. かさこ こさえて 町さ持っていったら、おかねに かえられんかのう。

なんだかそこで急に思いついた、「かさこ」つくるの思いついたようなんですね。それに対して瀬田さんの方の再話は、

【二】 2. じいさんは、まいにち あみがさをこしらえては、まちに 行って、それを うって、くらししていたと。

瀬田さんの場合は、「まいにち あみがさをこしらえては、まちに 行って、それをうってくらししていた」って語っているんですね。だから、常に笠をつくって生活の糧にしていた。

次に岩崎さんの方は、思いついて、スゲがそこにあったから、

【三】 1. かさが五つできると、じいさまは それを しょって、

と言いました。先程の方は、「笠、そんなにすぐにはできないよ。」という体験者の方の話がありましたが、確かにそうかもしれません。そんな手間のかかることを、明日お正月だからといってすぐにはできないかもしれませんね。それに対して、常に笠をつくっているおじいさんっていうふうに語っている瀬田さんの方は、

【三】 2. きょうは、おれ、かさを 五つも こしらえた。

「だから、おれはそれを売りにいく。」と、流れが違った形になっていきます。それで、町にいったどちらも売れないんですけども、帰ってきたときに、岩崎さんの方は、

【四】 1. ふとみると、みちばたに じぞうさまが 六人たっていました。

はっとそのとき、偶然気がついたような感じですよ。それに対して瀬田さんの方は、

【四】 2. のほらには、いしのじそうさまたちが たっているばかり。

これは、いつもそこを通っているからそれを常に意識しているんでしょうか。

その次なんですけども、そういう雪のふるなか、野原のまんなかに、ふきっさらしのなかに立っている地蔵さまを見て、岩崎京子さんの方は、

【五】 1. おお、おきのどくにな。さぞ つめたかろうのう。

それに対して、瀬田さんの方は、

【五】 2. あやあ、むごいことだなあ。はだかでゆきかぶって さぞ さむかろう。

どうでしょう。みなさん、ちょっと微妙にニュアンスが違うように感じますでしょうか。わたしは、なんとなく「おきのどくになあ」っていうのは、神様や仏様への敬意をもって言ってらっしゃるのかなあ、それに対して、「あやあ、むごいことだなあ。はだかでゆきかぶって…」というのは、神様仏様でもあるんですけど、もう少しなにか身近なものに対して言っているようなニュアンスがあるような気がします。

で、ひとつ笠が足りなかったんですよ、どちらも。岩崎さんの方は、

【六】 1. 自分の つぎはぎの てぬぐいとして、

瀬田さんの方は、

【六】 2. 自分のかぶっていたかさをぬいで

これは物の違いなんですけれども、こうした違いも出てくるんですね。

そういうふうにして売りにいった笠を、地蔵様に全部かぶせてしまって、で、帰ってきたら、おばあさんはふたりともおこらないでやさしく迎えてくれるんですね、「仕様がな」と言って。

どうやって大晦日の夜を過ごすかという、岩崎京子さんの方は、

【七】 1. もちつきのまねごとをして、…つけな かみかみ、 おゆを のんで

っていうふうに、「貧乏なんだけど悲しそうでない」ってどなたかおっしゃいましたけど、ふたりで楽しんだような感じで、「つけなかみかみ おゆのんで」、餅が買ってこれませんでしたからそれで歳を越します。それに対して瀬田さんの方は、

【七】 2. すっぱりめしを さくさく たべて

これ、なんなんでしょうね。ちょっとこれは気にかかる表現じゃないかなあと思います。

寝てしまったじさま、ばさまのところになにか声が聞こえてきます。そのかけ声が、大きな物を引っ張ってくるようなかけ声なんですけれども、

【八】 1. 六人のじそうさ かさこ かぶせた じさまの ちは どこだ ばさまの ちは どこだ

瀬田さんの方は、

【八】 2. 六だいじぞうさ かさとって かぶせた じいあ ちはどこだ、ばああ ちはどこだ

意味は同じなだけで、その歌のような詩のようなかけ声は、それぞれ違ってきます。

実はお地蔵さまたちが引いてきてくれた送り物なんですけれども、なにかというと、岩崎京子さんの方は、

【九】 1. こめのもち、あわのもち、みそだる、ごんぼ、だいこんのかます、おかざりのまつ

それに対して瀬田さんの方は、

【九】 2. もちやら、さかなやら、いえにかざるたからやら、こがねやら

ここで、岩崎さんの方は畑の物も含まれているのがちょっと特徴なのかなと思いますね。

そうして運んできたお地蔵様ではあるんだけど、それをおじいさん、おばあさんはどういうふうに見送ったかということ、岩崎さんの方は、

【十】 1. かさこ かぶった 五人のじぞうさまと、てぬぐいを かぶった じぞうさまが

それにたいして瀬田さんの方は、

【十】 2. 六にんの あみがさを かぶった ひとたちが

って言います。

はなしを読んでくると、地蔵様が運んできたんだらうなと思うんですが、ここでは「ひとたちが」と、そういうふうには語っているんですね、瀬田さんの方はね。

もうひとつだけ再話をあげてみたいと思うんですが、松谷みよ子さんの「かさじぞう」というのがあります。一部だけ読ませてください。一番最初のところと地蔵様のとこだけ読みますね。

松谷みよ子再話『かさじぞう』[2006 童心社 絵 黒井健]

むかし やまのむらに かさつくりの じいと ばあがいた。
スゲという くさを かって ほして、かさをあんでなあ、
くらし たてていた。
ふたりの あいだに、六人、こどもが うまれたけれど、ちゃっこいうちに みな、あのよへ い
ってしまってねえ、ふたりぐらしだった。

じいさまばあさま の、くらしの説明が、こうゆうふうに出てくるんですね。
それから地蔵様のところ、

きがつくと、そこは 六じぞうさまのまえだった。
のっばらに ぼつんと たってござる。
あたまも、からだも、どっぷり ゆきかぶってなあ、
じい、おもわず、
「おお、さむかろ さむかろ、つめたかろ」
そういうて、ゆきをおはらいもうした。
「そうだ、うれのこりで もうしわけねえが、おらのかさ さしあげるべ」

となっています。

以上、さまざまな再話をみなさんと見てきました。

記録 山田 裕子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

5. 伝承の語り手が語る「笠地蔵」の映像を見る

語り手紹介 小野 和子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

小田嶋一次にですね。民話の伝承の語りと言われる、もともと伝えられてきたおはなしについて小野和子さんにお願いいたします。

小野一みなさん、ここには語りをなさっている方もたくさんおられます。ひとつの話を自分の身体をとおして語ると、どこかでその人の様子が出てくるんですね。そのことを今、小田嶋さんが縷々、説明してくれました。

【身体を通して話を語る】 先程「笠をひと晩で五つもつくるのか」って、笠をつくった経験のあるおじいさんがそう言ったと言われましたね。そうなんですよね。岩崎さんの話は、笠づくりのおじいさんじゃないんですよ。困ったな、どうしようかなと思ったら、スゲがそこにあった、「じゃあ、あのスゲで笠でも拵えましよう」って、その晩、笠拵えて、五つもひと晩で年寄に笠ができるもんかなあと思うんですけど、岩崎京子さんという作家の生活感覚がそういう言葉を導き出してるわけですね。

そこへいくと瀬田貞二さんの方は、笠をつくって暮らしを立てていたっていうからいっばいつくっているわけですね。ですから、五つでも六つでも持っていくことができたという、そういう暮らしの感覚。そして、民話では必ずなんで食っていたかっていうことはよく出てくるんですけども、瀬田貞二さんの再話の方は笠をつくって暮らしてたっていうのに対して、岩崎京子さんの方はなんで食っていたのか最後までよくわからないんですね。畑やっていたかなあと思うと、最後にニンジンやゴンボウまでもらうからおかしいなと思うし、いろんなふうに矛盾をはらんでしまうってことは、それをもう一度自分の身体をくぐらせたときに、その人の身体が出てきちゃうんです、言葉にね。

ですから再話というのは、そういう意味ではとても面白いものであり、こわいものであるっていうことの例を、今お二方の例で小田嶋さんが説明してくれました。

【宮城の「笠地蔵」】 わたしどもは、これから、あすこに（会場に設置されたスクリーンに）写真だけ出ていますが、実際に語りで語ってくださった方のDVDを観ながら「笠地蔵」を聞こうと思います。

実は、小田嶋さんが先に言ったように、わたしどもは宮城県のなかで四十話余りの「笠地蔵」を聞いております、あっちやこっちで。その四十話もほとんどいろんなふうに変う、大筋のところで似ているところがあるけどもまた違う、その違いはやっぱりそれを語った人の身体の違いと言ったらいいでしょうか、精神の違いっていうようなものを反映しているような気がいたします。

【語り手 永浦誠喜翁】 今ここに出ている方の語りを聞いていただきますが、この方は永浦誠喜さんっていう方で、明治四十二年（1909）に生まれて平成十四年（2002）に亡くなりました。九十二歳で。ですから、もう亡くなってだいぶになるんですが、わたしが出会った民話の語り手のなかで最も大きな語り手のおひとりでありました。

そして、この方はですね、いわゆる再話ではなくて何遍語ってもらってもいつも同じなんです。で、「どうしていつも同じなんですか」と言うと、「このように聞いてきたから、このようにしか語れない」という返事で、「小さいときからこのように聞いてきた」というふうに話をされる。わたしどもは、これを伝承の語り手というような言い方で読んでおりますが、その代表的なおひとりでいらっしやいます。

それでね、永浦誠喜さんのことを、採訪でわたしたちはどういう人にどういうふうに出会って、どういう

ふうに今日まで付き合ってきているかという道筋を、ちょっと知っていただきたいので話させていただきますとね、永浦さんの話をわたしどもは集中して聞かせていただいたことがあるんです。

永浦さんは登米市の南方町ご出身なんですね。で、南方町の方に行ってお話を聞いたり、わたしの家に来ていただいて語ってもらったりしたこともあったんです。次から次とおはなしが出てくるのでどこまでいったら止まるかと思って、一九八五年から一九八八年にかけて、永浦さんを仙台へお呼びして泊まっていたことがありました。とにかく聞いて聞いて聞いたら、二百七十三話語られたんです、そのときに。

これはその折りにつくった資料集です。こんな粗末なもので、千九百八十五年頃はパソコンもワープロもなかったんで手書きなんですけれどもね、わたしども、こんなふうな資料集を二十冊近くつくりました。ここにはちょっとしか持ってきていませんが、こういうものを二十冊近くもつくる程だったんですね。

ひとりの人の頭に、こんなに話が入ってるのはどういうことなんだろうってお思いになるでしょ。わたしどももとっても不思議でした。その後も、永浦さんには折りにふれていろんな形でお話を聞かせていただいておりました。

【二十年たっても変わらない話】 最初に永浦さんにこうやって集中的にはなしを聞いたのは、七十歳のときだったんですよ。それでね、二十年たって、「今度九十歳になったよ」と言われたのでね、永浦さんそこへ行って、「もう一回、あのとき聞いた話を全部聞かせてください」ってお願いしたんですよ。そしたら、「ああ、いいよ」って気持ちよく言っていただいて、わたしどもは一年かけて、七十歳のときに聞いていた二百七十三話を、九十歳になられたときにもう一遍全部聞いたんですよ。

そしたらびっくりしますけれども、同じなんです。二十年たっても、変わらないんですね。で、あまりの不思議さっていうか、身体にためられるはなしってこうやって変わらないでためていかれる、それはなにがあってもこの形を守っていくという永浦さん自身のお気持ちがあるからで、それでその九十歳のとき聞いたものを、こういうふうには活字にしました。そしたら、上・中・下三巻になってしまったんですね。これは、『みやぎ民話の会叢書』といってわたしどもの会が細々と出している本なんですけれども、他の叢書はたいてい一冊なんですけれども、永浦さんにいたっては三百話近くになってくるので、どうしてもこんなふうになっちゃったわけですね。

それでもこうやって残せたことを、わたしは誇りに思っているんです。で、これは七十歳のときに聞いた話とほとんど同じなんです。擬態語も、「雪がもさもさ降ってくる」と言うときもそうおっしゃったし、九十歳になっても、「雪がもさもさ降ってきて」って、こういう語りなんです。すごいでしょ。

はなしを受け継ぐということのものすごい力を、わたしは永浦さんから教えていただきました。

【繰り返し聞いて話が身体の中に住みつく】 そしてですね、さっきも言ったみたいに、「どうして変わらないの」って言ったら、「聞いたとおりに覚えている」って。「聞いたとおりに覚えている」というのは、どういうことかという、毎晩聞いたってことなんですね。繰り返し繰り返し何十回も聞いたということで、永浦さん自身の言葉をちょっと引かせていただくんですね、「物心つくころから、昔話を聞いて育ったようにも思います。三つ上の姉がいたので、祖母はおもに姉にこの世に生きていくために聞かせていたのを脇から聞いて、わたしの方が虜になって、毎晩せがんで、同じ話を繰り返し繰り返し聞いても少しも飽きませんでした」

その頃なんの楽しみもない、おばあさんも忙しくて毎日動き回っているけども、例えば竈の火を焚くためにおばあさんがそこにうずくまる、囲炉裏の側で縫い物するためにおばあさんがそこに座る、おばあさんの身体が座るとすぐそこに行って、『むがす語れ、むがす語れ』って攻めた』って言うんですね。そうすると、おばあさんは、「んだったら語る」って言って、毎晩はなしを聞かせてくれたって言うんです。「ほかになんの楽しみもないから、その話が非常に自分の身体のなかに住みついたんだ」っていうふうに言っていただきました。

同じ話を何度も聞く力を持った子どもだったんですね。今の子どもたちが「それ昨日聞いたからいやだ」なんて言っても、本当は押さえて、同じはなしを聞かせるくらいの勢いで語っていかないといけないんだと思うんですね。

【繰り返し語る】 そうやって、永浦さんは同じ話を語り続けた方であったわけなんです。

でも、「それにしてもよくそんなふう覚えてますね」って、わたし、びっくりするんです。いくら何回も何回も毎晩聞いても、二百七十三話を全部覚えて、二十年たってもう一回聞いてもすっかり同じだったなんて、とっっても信じられないような気がするんですが、事実なんですよ。

そしてね、どうして覚えていたかというね、その頃小学校では、雨天体操場とか体育館なんてないから、雨降ると、先生が教室で、「順番に昔ばなし語れ」って言うんですって。先生が子どもたちにね。まだ電気もない小学校ですよ。そうすとね、「みんなで語るけども、いつまでも語って種を持っていたのが自分だけだった」と言うんですね。最後にはね、先生に「永浦、お前語れ」って言われて語るんだけど、「自分の独壇場みたいになってた」とおっしゃいました。そうやって語ってきたんです。

【軍隊での昔語り】 そして、これってほんとに忘れられないんですけども、わたしは別のときに本吉郡本吉町っていうところに、やっぱり民話をさがしにいて、ひとりのおじいさんに会いました。佐藤信悦さんというおじいさんなんですが、その方からはなしを聞いていたら、なんか永浦さんのはなしによく似ているのね。あらあとと思ってたら、「実はこれは軍隊で永浦誠喜さんっていう人から聞いた」って言うんですね。

永浦さんは三十六歳のときに兵隊にとられて、それで、まあ、三十六歳の老兵ですから、外地へはやられないで青森の駐屯地かなんかそういうところにいる、そして、訓練していたんでしょ。そこに宮城県の人たちがけっこう集まって、心細くなったり、自分の息子みたいな若造に頭叩かれたりしてしょんぼりしていると、夜になると永浦さんが「むがし語るぞ」ってむがし語ってくれたって言うんです、軍隊で。

こんな話も本当に心を動かさずにはられません。「なにもらって食うより元気が出た」って言われるんです、聞いた人がね。

永浦さん、そうやって軍隊でも語り、小学校でも語り、そして、また求められれば語っているうちに、「こんなにいっぱい覚えて語ることができた」って。

でもね、永浦さんはいつも言われるんです。「聞いてくれる人があったらこそだ」って。「あんだだちが聞いてくれてありがとう」って、いつも深々と頭を下げられる、そういうお百姓さんだったんです。

【村で一番初めに】 永浦さんは一生百姓なすった方です。小学校を出てすぐ農業に従事されて、しかもですね、永浦さんの農業の話もまた非常に面白いんですけども、例えばキャベツなんて野菜は宮城県にはなかなかなかったんだそうです、むかしは。で、タマナって後に呼ぶようになって、「タマナを一番初めにつくったのはおれだ」と言われたので、「どうして」って言ったら、「小学校出て農業の学校にいった友だちいたんで、そいつに話をいっしょけんめいいつも聞いた」って言うんですね。「そいつが、学校で『タマナってものがある』て教えて、『こういう苗がある』って言うからその苗をもらって、村で一番初めにタマナを拵えた。それから、「サトイモを初めに拵えたのもおれだ」って言われるんです。「へえー」って思うでしょ。

でもね、こんな昔話があるでしょ。お伊勢参りに行って、宿で座敷に座ってお膳にご馳走が出てきた。サトイモがそこに出てきていて、どうやっていいかわからない村人が、「庄屋さんの真似すればいい」って言ってね、庄屋さんがお箸でそれをつまんで口に入れた拍子にぼろぼろ一とすべらして転がしたら、みんなも「転がさなければいけない」っていうんで、座敷にいた村人全員が箸でつまんでサトイモ転がしたという民話あるでしょ。覚えてらっしゃると思うけど。つまり、東北の人にとってサトイモは珍しかったんですよ。ですから、どうやって食べていいかわからないから、「庄屋さんが転がしたら、自分も転がして食べるんだと思って転がしたぜ」って言いながら、そうやってサトイモっていうのを覚えていったんだと思います。

サトイモやタマナだけではなくてですね、タマネギとかですね、自分が初めて村に持ち込んだ野菜の話をしてもらおうと面白いんです。もうそれだけで、民話みたいになっちゃってね。そして、そうやって村のために尽くして、しかも面白い物ができると、種を共同購入したって言うんですね。自分だけでつくって売るんじゃないくて、村の人みんなに教えて。

種ってものはいいい種をまかないと、いいものがないってことがわかったから、いい種を見つけてきてそれを頼んで共同購入したって。なんとかっていうお店で、店の名前も聞いたんですけども、ちょっと今忘れちゃった。その店の種は特に良かったんですって。

【花菖蒲の最初の一株】 宮城県の方は御存知ですけども、南方町っていうのは花菖蒲で有名などこなんですよ。大きな菖蒲園があるの。その最初のひと株を植えたのは、永浦さんなんです。わたしが初めて永浦さんのところに行った頃は菖蒲園なんてないんです。川原にいくつか植わっているんです。「こんなにきれいな花が世の中にあると思ったら村にもこれを植えたいともらってきて川原で植えて、みんなにも『これを増やそう』って話して増やしてきた」って、最初に永浦さんがわたしに花菖蒲見せてくださったときには、川縁だったんですね。そしたら、村中が花菖蒲植えるようになって、そして今や宮城県でも有名な南方町の花菖蒲園ができているという、こういうわけなんですよ。

生涯を農業に捧げながら、そして民話を語り語りしながら、本当にこういう方こそ無形文化財だと思うんですけども、そういうふうにして生きてこられた永浦さんが語る「笠地蔵」の話を聞いていただきます。前置きが少し長くなりましたけれども、このような方がこの永浦さんです。

そしてこのDVDはですね、この頃はメディアテークの方に助けていただいて専門の方にりっぱなDVDを撮っていただくんですが、これは九十歳になられて、お願いしてもう一度全部聞いた折りに、わたしはなんとしてもこれは留めなくてはならないと思って、ホームビデオを置いてですね、撮ったものなんです。素人が撮ったものですからうまく撮れていないんですけども、最後にそうやって九十歳になられたときに、語ってくださったときのDVDです。では、よろしくお願いします。

『笠の観音さま』

語り 永浦誠喜さん（宮城県登米市南方町・明治四十二年～平成十四年）

笠の観音さま

むがし、おじんつあんとおばんつあん、ふたりだけで暮らしてだ家あって、そのおじんつあんは、年中笠作って、町さ売っさいって、そいづで暮らしていだんだど。

ある年の暮れに、

「歳としもとなげね。正月になっながら、町さ少しぐれえ持って行って、売ってこんべ」
って行ったら、そしてるうちに雪が降ってきた。

年の暮れで笠などあってもなくてもいいのだから、全然じえんじえん売れなくて、そのまま持って帰ってきた。

で、帰ってきたれば、山道の途中にお地蔵さんいて、そして、雪がもさもさ降ってきた。

「かわいそうだから、お地蔵さんさかぶせでいぐべっちゃん」

って、持っていった笠あるくれえ、お地蔵さんさかぶせで帰ってきたんだど。

家では、おばんつあんが、

「なんぼじえに銭持ってくっか、正月過ぐすくれえのじえに銭持ってくっぺちゃん」

って待っていたらば、

「さっぱり売れねがら、お地藏さんさかぶせてきた」

って、おじんつあん、帰ってきたんだど。

したっけ、おぼんつあんも、

「いがった、いがった。お地藏さんさかぶせてきたとすれば、お地藏さんさ、雪当だんねえぱりもいがんべ」

って、おぼんつあん、そういう気持ちのやさしい人だったんだど。

ふたりで、漬物でお湯飲んで、はあ、飲まず食わずで、食わねえで寝でしまったど。

したっけ、夜中になって、遠ぐの方から、なにかがやがやって騒ぐ音する。だんだんに家さ近づいてくるんでね、

「ふしぎなごどあるな」

って、おじんつあんとおぼんつあんと聞いていたら、

笠の観音が

せんからやそう

千唐八曳の宝物を 持ってきたあ

そういう掛け声の歌みたいなものだったと。

「なんだや、ずいぶん騒ぎながら来るものいた」

「なんだっけ、あいづ」

っていったら、そしてるうちにだんだんと家さ近づいてきて、家の庭まで来た音したんだど。そして、家の庭さ来てがら、さっきよりも大きな声で、

笠の観音が

せんからやそう

千唐八曳の宝物を 持ってきたあ

と、そういう歌みでえなのといっしょに、どす一んと庭さなにが置いだよな音したんだど。

「ばば、起きてみろわ」

って、おじんつあん、言ったっけ、

「だれえ。おら、おつかねえがら、おじんつあん、お前^{めえ}、起きてみらいん」

「おらも寒くてやんだっちゃ。お前^{めえ}、起きて出てみろ」

だれも起きねえで、夜明けてがら、戸お開けて見たれば、戸の口のどこさ、米だの味噌だのいろんなものをたくさん、お金もなんぼかあったらしく置いていったんだど。

「昨日、笠かぶせてきた地藏さま、お礼の気持ちで持ってきてくれたんだがしねえが、ありがてえこった。とにかく地藏さんのどこさ行ってみんべ」

って、おじんつあんとおぼんつあんどふたりで行ってみたら、地藏さまだちあにこにこって笑っていたんだど。

「たしかに地藏さまだちあ、お礼に持ってきてくれだんだっちゃな。ありがでえごった」

ふたりしてたいへんよろこんで、めでてえ正月迎^{むげ}えだんだと。

そうしてるうちに、隣がら、ばんつあま、火もれえに来たんだと。

「なんだがこっちで景気いぐなったこだあ。どういうわけっしや」

って聞いたがら、「こういうわけだ」って話したら、

「ほんでえ、おらどこのじんつあまも、笠持たせてやんねげねえ」

って、隣の家でも、じんあつあま、笠拵^{しよ}えて、背負って、町までいったんだど。そして売るってうごども語んねで帰ってきて、地藏さまいるどこまで来たど。

「なんだ、こすたな笠かぶせて。おれ、りっぱな笠かぶせていんからね。おれさも宝物持ってきてけら
いんよ」

って語ってきた。

んでえ、やっぱり夜中になつたれば、音してきたんだど。

かさ かんのおん
笠の観音が

やっけえもの
千唐八曳の厄介物 持ってきたあ

って、どさつとなにか置いていった。

やっけえもの
「厄介物」聞こえないがら、

「たしかに宝物置いていった」

って喜んでいたんだど。

次の朝起きてみたら、いろんな臭えものがらなながら、がらくたもの、そごらじゅうに山ほどつんで
あつたんで、それ片付けんのに大変なめにあつたんだど。

んだがら、人のまねなどするもんでねえんだとしゃ。

えんつこもんつこ さけたど

小田嶋—時間的にはまだ十分ありますけれども、みなさん、いろんなことを聞いたり考えたりされて、少し
頭の中を整理する時間も欲しいかなと思いますので、五分程休憩を入れまして、その間にも、隣の方でもい
いので意見交換されるのもいいですし、お手洗いにいかれるなり、しばし休憩をとりたいと思います。

清水—そうですね。そしたら3時15分にまたこちらにお集まりいただければと思います。今、永浦さんの語
りを観ていただいたものも今こちらに貼り出しておりますし、みなさんから最初に出てきた疑問点とか関心
のある点なども黒板にメモをとっていますので、ぜひそちらもご覧になりながら、ちょっと後半に向けて気
持ちを整理していただけたらと思います。よろしくお願いします。

・・・・・・・・・・ 《 休 憩 》 ・・・・・・・・・・

記録 山田 裕子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

6. 採訪者の目でとらえた「笠地蔵」の周辺—老夫婦・地蔵など—

話題提供 小野 和子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

清水—では、そろそろですね、後半を始めたいと思いますので…大丈夫ですかね。前半のほうから、皆さんすごくたくさん意見を下さっていて、後半、一番最後にですね、また皆さんのご意見を伺いながら、話を深めていきたいと思っています。イベント自体は四時半終了としていますが、もしかしたら、少し延びる可能性があります。ただ出入り自由のイベントですので、お時間が決まっている方は、途中で退座いただいても構いませんので、お時間の許す限り、どうぞ後半お付き合いいただければと思います。それでは後半始めてまいりたいと思います。よろしくお願いします。

小野—後半の話題提供をさせていただき小野でございます。申し遅れましたがよろしくお願いします。

永浦さんの語りを聞いていただきました。殆んどケレン味のない、何とか良く言えば淡々として、悪く言うと変化も何もない一本調子みたいで、これ、ずうっと聞いてると、ほんとに眠くなるんですよ。私、ほんとに寝ちゃったことがあったの。「あつ、寝てるんだ」なんて怒られたこともあったんです。ほんとに眠くなっちゃうんです、これ、いくつもいくつも聞いてるとね。

でもそういう語りが、本来の民話語りなんですね。今語りを学ばれる方が、とてもドラマチックに民話を語ったりされる場面も場合によっては要求されることもあるかと思うんですけども、従来聞いている話というのは、ほんとに気持ちのいいリズムで、気持ち良く眠ってしまうような話なんですね。

【子のない爺婆—日本民話の独壇場—】 永浦さんの話を聞かれて一番おやっと思われたのは、永浦さんの話には、隣の爺さん婆さんが出てきましたね。今までのには、全然出てこなかったけども、隣の爺さん婆さんが出てきました。で、隣の爺さん婆さんが出てくることについては、また考えていることを披露させていただきたいと思うんですけども、その前にですね…

私は、先程言ったみたいにたくさん笠地蔵四十話余りも聞かせていただいてきて、隣の爺さん婆さんが出てきたり、貰うものが違っていたり、かけ声が違っていたり、商売が違っていたり、さまざまあるんですけども、共通していることは、どの話もお爺さんとお婆さんが二人暮らししているところから始まって来るんですね。共通して、お爺さんとお婆さんが二人暮らししているということについて、ちょっと話をさせていただきます。

ご存知と思うけど笠地蔵に限らず、私ども日本民族の民話は、世界に類を見ないくらい、お爺さんとお婆さんがまず出てくるんですよ。そしてこの二人には子どもがないんです。そして、この二人はどうやら山の際に暮らしているらしい。これを見てくださるとわかるけど、笠を作ったお爺さんは、町へ売りに行ったというんです。ですから、山際にいてそこから山道を歩いて町へ行くときにお地蔵さまに会うというふうに、何も山の方に住んでなんて言わないんですけども、暗示的に山の際に住んでいたことを語ってくれます。

思い出していただきたいのですが「桃太郎」も、「瓜こ姫」、「一寸法師」、「カチカチ山」、「力太郎」それから「舌きりすずめ」とあげていくときりがありませんが、日本の代表的な民話は、大抵お爺さんとお婆さん、そして子がないことで共通しているし、山際にぼつんと暮らしている気配で語られている。ここが凄く大事なところだと思うんですね。

それから永浦さんのように、隣の爺さん婆さんが出てくる話といえば、「瘤取り爺さん」とか、「花咲かじいさん」とか「ねずみ浄土」とか「鳥のみ爺」とか「屁つたれ爺」とか、まねっこする隣の爺婆もいっぱい出

てくる話なんです。いずれも隣の爺婆にも子どもがないんです。子どものいない老夫婦が、山の際に暮らしていて、どうやら隣同士でいるらしいということなんですよね。そして、ここから物語が始まることを私は大変不思議に思いました。

【採訪から見える爺婆の姿】 それで、昔話を聞きに回ると 必ずこの村に子のないお爺さんやお婆さんは居たんですかって聞くことにしてるんです。すると、「うーん居たかなあ」と影が薄いんですねやっぱり、子どものいないお爺さんお婆さんというのは、「いたような気がするなあ、あの橋のたもとで、こっそりひっそり暮らしてたなあ」というような言い方ですとか、それからすごく衝撃的な話だったのは、これは村田町の奥の方で聞いたんですけども、「これは実話だよ」とおっしゃって、「子のない爺さん婆さんがいて、結構身上もあったんだけど、男と女の子どもの両方を養子に取って、お婿さんとお嫁さんにして跡取りにしようと思っても、上手くいかないで出て行かれてしまって、最後には、老夫婦で残っていた」と言うんですね。でも田畑なんかもあるもんだから、それをまあどうしたかちょっと分かりませんが、でも自分たちでは手に負えないもんだから、「それを売って、そして山の方に移って行った」と言うんです、その老夫婦が。

【山に移り住む爺婆】 山に移って行ったという言葉で思い出すんですけども、みなさんもお聞きになったことがあると思うんですが、「食えなくなったら、里へ行くな、山へ行け」という言葉があるんですね。「食えなくなったら、里の伯母を頼るな。山へ行け」生活に困ったら、町のおばさんを頼りにしてお金を借りにいったりしないで山へ行け。山へ行けば木の実もあるし、ウサギの一羽も罨かければ取れるから、山へ行け。山はそういう恵みのある所なんです。それで子のない爺婆は、この山へ行って大抵暮らしているんですよ。そういう格好で話されているわけですね。

今、田畑を売り払って、子のないまま山へ移って行ったという村田町の奥の、お爺さんとお婆さんのことですけども、これを言ってくださった方がいるんですけどね。「あるとき、どうしてるかなあと思って、暫くして訪ねて行った」というんです。そしたらね、「二人して首吊ってた」というんですよ。そしてね、「首吊ってただけじゃなくて、首だけ縄にかかって、あとはストーンと下に落ちちゃって、落ちた胴体が胡坐かいてたんだよ」とって、ほほほと笑うんですけども、もう笑うより仕様がなような残酷な場面ですね。山へ移っていった爺婆のもとへ、訪ねてくる人が殆んど居なかった為に首吊って死んで、首と胴体がはずれるくらい時間が経っても、誰も来なかったということを暗示していると考えていいと思うんですよ。

そのくらい子のない爺婆の存在は、私どもの日本の村落共同体が、ぎっちり生活を囲んでいた環境の中では、生きにくい存在であったのかと思うんですね。

【ムリがこわい—ムラ社会からの疎外】 先程、ちょっと絵本で出ました松谷みよ子さんが、書いておられるんですけども、松谷さんがあるとき、屋根葺きの話を、やはり民話を聞きにいったとき聞いておられたそうです。そしたら「大福帖」を出してきて「おらいの屋根葺いた時は誰が来て、何日働いてくれて、誰が何日働いてくれて」と全部書いてあったというんですね。こんどは、あっちの家の屋根を葺くときには、手伝いを出さなくちゃならないっていうふうな収支決算書が、ひと時代前はあったわけです。「結い」でやってるからね。で、松谷さんは聞いたんだそうです。「労力を提供できるうちはいいけども、年とって子どももいなくて、労力を出す何もない爺さん婆さんはどうなるんですか」と聞いてたら、そのときに、「次第に交ぜなくなる」という言葉が返ってきて、松谷さんはびっくりされたそうです。つまり、さっき山奥へ、田畑を売って入っていく老夫婦のように、村の共同体に交ざれなくなった。子どもがいれば、子どもを出すことが出来るけれども、子のないまま年老いて、村の共同体に入れなくなった爺婆というのは、村から次第に離れて

いかざるをえなかった。

もうちょっと説明すれば、みなさんもご存知のように、ひと時代前までは全部「結い」^{ゆい}でやってましたよね。屋根葺きでも田植えでも稲刈りでも道路の普請でもなんでも共同でやっていた。その共同作業に、自分
は出られなくなると、息子を出したり、娘を出したりするけれども、子のないまま年老いた人たちがどうな
っていくのかというと、次第に交ぜなくなるって松谷さんが書いておられるんです。

そうするとね、「古家の漏り」なんて民話があるでしょ。古い家の屋根が雨漏りしておっかない。古家の漏
りほどおっかねえことはないという話は、実は、村から疎外されてしまうことほど恐ろしいことはないとい
う話かもしれないですね。屋根が漏るようになって、もう葺いてもらえないわけです、自分たちも出れな
くなってね。

【爺婆にもたらされる福】 そういうふうには、老夫婦の運命というのは、非常に、一番弱い立場に立たされたと言
っていいんですね。そして年をとっていきますから、もう一歩先に踏み出せばあの世へ逝かねばなら
ない。あの世とこの世の境にしながら、頼るものもなく、たとえば首を吊ってもそれを見にきてくれる人もい
ないような境遇の中におかれている現実というものがあって、そして、その人たちを繰り返し、繰り返し物
語の冒頭に据えて、その人たちこそ幸せになるべきだといわんばかりに、子種を与えたり宝を与えたりして、
語ってきた私どもの先祖の心を私は思わずにはいられないんです。

笠地蔵の老夫婦についても同じことが言えますね。そして、永浦さんは、特に二人だけで暮らしていたっ
て、ちゃんと「二人だけで」と念を押しているんですね。子どもがいない、そして、笠を売って暮らすと。永
浦さんの、先程読んだ瀬田貞二さんもそうですけど、笠を売って暮らしを立てているというふうには書いて
あります。つまり田畑^{でんぱた}を耕していないんですね。田畑仕事というのは、力が要りますから年寄りには難しい
ですね。家の中で笠をつくって、笠を売って暮らしている。その笠を町へ持って行って売って、さりげなく
語っているんですけども、私はこういうところに民話の深さを思うんですね。何気なく背景を語ってい
るんです。

【爺婆の生きる術と貨幣経済】 先程、小田嶋さんが、第一回のゆうわ座は「かちかち山」をやりましたと言
てくれましたが、「かちかち山」はですね、やはり爺さん婆さんなんですけど、山の畑にお爺さんが、豆の種
を蒔いていた。農作業で、しかも山の畑で豆の種を蒔いていた。そこへ狸が出てきて、からかうもんですか
ら、一旦は狸を捕まえるんですけど、逆に狸にお婆さんを食われてしまうという、動物と人間の争いながら、
まだ人間が負けていた気配をにじませる「かちかち山」。その代りに、ウサギが出てきて仇討ちしてくれる、
人間じゃなくてウサギが代わりに仇討ちしてくれるという話なんですけども、「かちかち山」では山の畑に豆
を蒔いた。

それから二回目のゆうわ座でやりました「さるとかに合戦」。これは、さるとかにが握り飯と柿の種を交換す
る話ですね。さりげなく物々交換の時代背景をこの話は語っているんですね。そして手にいれた柿の種。実
がなる植物の種を植えて、水をかけて栽培していく。栽培の気配を示してくれているんですね。ちょっとこ
こは、深入りすると前に進めなくなるので、やめますけれども…。

「笠地蔵」の方はどうかというと、家の中で笠を作り、それから別の笠地蔵では、お婆さんが布を織って、
その布を売りに行く話もあるんです。どっちしても老人が家の中でできる仕事をして、それを町へ持って行
って売る。貨幣経済が忍び込んできているんですね、ちょっと大げさな言い方をすると。町へ持ってって、
作ったものを売って、その金で物を求めてくるという、こういう世の中の様子を表しています。

よく、「世の中の変革は、一番貧しい底辺の者のところから発生する」というような言い方をされるけれど

も、私はここで笠を売ったり、布を売ったりするお爺さんやお婆さんの、町へ持って行って売って、金を手にいれようとする姿に一種の貨幣経済の発祥といたらいいでしょうか、そんな気配さえ感じます。そして同時にそれは、山から町へ歩いて行って、売らなくては成り立たないお爺さんとお婆さんの姿であったわけですね。

【生と死の境にいる爺婆】 こんなふうに行くわけですね。そして笠を売って、売れなくて帰ってくるわけですね。それで岩崎京子さんの「漬け菜噛み噛み、お湯を飲んで」、それから瀬田さんの「すっぽりめしをさくさく食べて」というんですね。絵本で註が書かれていて、「すっぽりめしは、おかずのない白いご飯」と書いてあるんですけど、私は民話の採訪のときに、「さくさくめし」という言葉を聞いたことがあるんです。それは、「さくさく」と音たててるけど、食ってないんだと言うんです。食ったまねだけしているんで、「さくさくさくさく」って。それで、瀬田さんの「すっぽりめしをさくさく食べて」とあって、註に「すっぽり飯は、米のおかずのないご飯」って書いてるけど、私はもしかすると「さくさく」の方にウエイトがあるんじゃないかと期待するんですよ。でもそれは、はっきり証明できませんけれどね。ですから、とにかくお湯を飲んだと。

それから永浦さんのになると、はっきりして、「漬物でお湯を飲んで、飲まず食わずで、夜をすごした」というのね。つまり、最後の手段であった笠を町へ売りに行き、それが売れなかったということで、家へ帰ってきて、何も食べないでお湯飲んだ。もしこれが明日も続き、明後日も続き、お地蔵さまの恵みがなかったならば、お湯を飲んで何も食わないで寝たということは、既に死の世界に入ったということであり、死の世界へ行かざるをえなかった老いた爺婆が、もしかすると、あの世で幸せになったということかもしれない。あの世の象徴のように地蔵さまがいる。永浦さんの場合は、「笠の観音」って。「地蔵じゃなくて観音なんですか」って聞いたたら、そしたら「そうだ」って。そして、「地蔵菩薩さまより観音菩薩さまのほうが位が上で、せいほうじょうど西方浄土におられるから、そこへ行ったということじゃないですか」と。

つまり観音さまが下りてこられたということは、死んだとは言わないまでも、死んだかもしれない爺婆の姿を暗示してるとは思いませんか。そうして、命の再生のように、地蔵さま或いは観音さまの助けがあったということで、もしこの助けがなかったならば、現実としては、二人の老夫婦は年を越せないまま、あの世に行って幸せを掴んだということになるかもしれません。

【地蔵さまに寄せる思い】 それで、もうちょっと戻りますけれども、じゃあ笠を被せるという行為。「自分たちが食うや食わずなのに、地蔵さまに笠を被せてくるなんて、なんてあったかい」という言い方と「なんて甲斐性がない」、甲斐性がないっておかしいけれども考えがないということもあるかもしれませんが…。

実は、皆さんにお配りしたこの資料を見てください。一番初めに、渋谷勇夫さんの語りと書いています。みんな亡くなってしまったんです、これを語ってくれた方々は。ですから顔を浮かべながら、ここで話をさせていただきますけれども。

中新田町にお住まいの渋谷勇夫さんの語り（「六地蔵」）。町に行く話、中ほどですね。

で、とちゅうまで行ったら、お地蔵さんがいだったんだどやあ。えらく寒そうにしでっからど思ってなあ、

「ああ、お地蔵さんね、なんぼ寒かんべやあ。笠買ってきておあげもうすからね」
って、町さ行って笠買ってきたんだと。魚買わねで笠買ってきたんだとや。

[資料 p.3 上 1.10~14]

分かるでしょうか。先の三つの話は、笠が売れ残ったからお地蔵さんに被せたんだけど、勇夫さんの話は、最初からお地蔵さんに笠買ってきて、自分の魚は買ってこなかったと語っているんです。

同じように、次の浅野みねさんの語り（「六地蔵さん」）も見てください。浅野みねさんの語りではどういうふうになっていたか。

行く途中に、地蔵さんが六つならんでたんだと。ほして、雪、うんと降ってきたんだと。地蔵さんながめたらば、

「この寒いのに、吹きっさらしん^{どこ}所立ってござって、かわいそうだなあ」
って、行くどき思っ^てていったんだと。

町さいっても、そのこと^{おし}忘らんねくて、

「お正月用意して食べるよりは、地蔵さんさ笠買ってあげっかなあ」

[資料 p.5 上 1.11~1.18]

ここでも笠の売れ残りではなくて、積極的に笠を買ってくるんですね。それからもう一つあったでしょうか。

とにかく宮城県のお爺さんお婆さんは笠を売りに行って、永浦さんのは、売って余った笠でしたけども、最初からお地蔵さんに笠を被せる為^に笠を買ってきたというのが、結構たくさんあるんです。そして、それはお地蔵さまに寄せる想いなんですよ。それで、そのお地蔵さまをどうしてそこまで思うのかということになりますよね。

それからもう一つ、その早坂太作さんのも似ていますね。途中から言うと、

ところが、ほれ、道に地蔵さまあつたんだとしゃ。

「ああ、こりゃあ、地蔵さまも寒いかんべなあ。雪降って来んのだから」
つので、買い物に行って用足して帰って来っどき、

「笠買ってかぶせてけっかなあ」

[資料 p.8 上 1.10~1.14]

このときは、笠売りに行ったんじゃないんですけども、それでもわざわざ地蔵さまのために、笠を買ってくるんですね、なけなしのお金でね。

【地蔵さまはわが子の身代わり】 こんなふう^に地蔵さまに対して思いをかけるということ。そうすると先程もご意見がありましたけども、地蔵さまって一体何だろうかと思えますよね。大きな社殿の中、大きな建物の中に入っておられる仏像なんかと違って、地蔵さまはいつも、野原や田んぼの畦道に立っておられたりする。それだけじゃなくて、涎掛けしてもらったり、寒いときは帽子を被せてもらったり、夏の暑いときなんかは笠を被って立ってるお地蔵さんもいますよね。

まるでわが子のように扱われている、お地蔵さまの姿が宮城県にはたくさんありますよね、あちこちにね。そして田んぼへの行きかえりに拝んだり、声をかけたり、お団子を供えたり、キャラメルを1個置いてきたりして、まるで家族の一人のように地蔵さまを扱っている。信仰の対象というそういう美德とまた一味違う、なんて言ったらいいでしょう。まるで自分の分身のように、地蔵さまを扱っている。

この頃でもですね、道路に地蔵さまが立っていて、「どうしたんですか」と聞いたら、「ここで子どもが交

通事故にあったから地蔵さま供えてるんだ」って言って、地蔵さまが、その道で亡くなった子どもさんの代りに立っておられるところもありますし、私の知ってる友達は、山で子どもさんを亡くされたら、「あその霊園に地蔵さまを献じてきたの」って言うてくれた人もいて、地蔵さまというのは、なんか我が子の身代わりというか、子どもの神さま、子どもを見守ってくれてる仏さまという考え方もできますね。賽の河原にやられた子どもたちを助けてくれるのも地蔵さまだなんて言うて。そういうこともあるんですけども、私たちはやっぱりもうひとつ非常に衝撃的な話を聞きました。

【地蔵さまの下には…】 ついここ二、三年前なんですけど、升沢の方で出会ったお婆さんから聞いた話を映像で撮ってもらってるんですね。その映像、今ここでちょっと出て来なくて悪いんですけども、でもメディアテークの方で整理して、DVDにしてくださいましたので興味がおありだったら、そのDVDを借りて見ていただければいいのですけれども…。

そこで語ってくださったお婆さん、曾根つき子さんって九十二歳かと思うんですが、そのお婆さんがこういうふうに言われたんですね。その升沢という所は、仙台から約四十分位行っただけの、近い所なんですけども、非常に山奥の自然の厳しい所で、その下に王城寺原という自衛隊の駐屯地があるもんですから、その自衛隊がアメリカの軍隊を迎えて、実弾射撃で練習するために練習場が要るわけですね、やかましいから。それで仙台から近いけれども、山奥の升沢って所を実弾射撃の訓練場に指定されたために、そこの方たちはみんな、村を揚げて麓に移っていったという地域なんです。そこで生まれ育って、実弾射撃の訓練場になったから麓に下りてこられたお婆さんなんですけど、このお婆さんがこういうことを私たちに話してくださって、みんなでびっくりしたんですけども。

「おれのおばんつあんたちの時代は、ここは米が取れなくて。集落で米を作ってたのは三軒だけだった」と言うておられましたから、米が取れなくて食い物が無いから、「姥捨て山」と同じなんですけれども、「年取ってくると生き埋めにした」っていうんですね。そして山に捨てにゆくのは、「姥捨て山」ですけども、升沢では、「生き埋めにしたんだって。その年取った人は、埋められてゆくときに、自分だけではなくて、ちょっと余分な子のような、いらぬ子がいるとその子を抱っこして二人で埋められていった」って。そして、「その上に地蔵さまを建てた」と。本当に地蔵さまと思えないんですけど、石のような地蔵さまがあちこちにある地域なんです。ただその実弾射撃訓練場になって、一斉に村を出る時に、木一本残してはいけない。保証金が出ない。ですから地面に飛び出しているものは、全部なくしていけと言われてたそうで、地蔵さまも姿を消してしまったそうです。昔は非常にあちこちに地蔵さまがあったそうですよ。ああ、地蔵さまいっぱいあるなあと思ってたんですけどね。

ですから地蔵さまっていうのは、もう家族なんです。地蔵さまは、宗教の、信仰の対象であるばかりでなく、家族であったから寒ければ笠を被せずにはいられない。暑ければ帽子を被せずにはいられない。そういう家族としての気配を地蔵さまが持っていた、ということをお私たちはつい二、三年前、去年だったでしょうか、一昨年だったでしょうか、何人かで一緒に聞きまして、その語ってくださった記録をここにDVDにさせていただきます。

【地蔵さまは家族の一人】 そうすると、単なる地蔵信仰というような美しごとではなくて、底辺の暮らしの中では、地蔵というものは、家族であったというんですね。つきさんのもうひとつの話は、畑の隅なんか掘り返していると、兄貴が来て「そこは掘り返すな。お前はさわるな」と言うんです。って。「何で」って言うたら、「ここ掘ると骨が出てくるからだ」って言うて、妹には掘らせないで、自分が掘って、その骨をどこかのお寺に納めたなんて話もおっしゃってました。

そうしますと、笠地蔵のお爺さんお婆さんが、雪かぶってる地蔵さまに、笠を被せるという行為の底には、もしかするとものすごく深い実感があって、あるいは、それが薄れてきたとしても、形としてそれが残って民話で語られているということがあるのかもしれないと思いました。

そのことに、「人たち」ということを、さっき小田嶋さんが言ってくれたけど、例えば永浦さんも、にこにこにこにお地蔵さんが笑っていると、人間みたいにと言われたし、瀬田貞二さんも再話の中で六人の「人たち」と「人」という言葉を使ってる。こういうところはやっぱり書く人の見識ですね。六人の地蔵さまって、岩崎京子さんは最後まで地蔵さまですけれど、途中から「人たち」に変わっていつているということにも、ここで注目していきたいと思います。

話が長くなって済みません。西の方へ行きますと、雪でなくて雨だというんですね。雨降ってるから、地蔵さまに笠を被せる。ところが宮城県にも雨の話があります。宮床の君ヶ袋ちゑ子さんという方が、語って下さっている話は雨なんです。地蔵さまに、笠と蓑をあげるという、資料の一番最後の話です。非常に変わった話です。で、川へ行くと死体が流れてきた、死んだ身体が。それ拾ってきたら、それが金の塊になったという話ですね。

【大歳の火と死の影】 民話は、正月大歳をはさんで、よくこういう仕立てかたをするんですね。そして、それを媒介するものとして、火を持ってきたりします。さっき永浦さんの話で、隣の爺さん婆さんが火種貰いに来たという、火というけれども、「大歳の火」というような話がありまして、大晦日に火種を切らしたお嫁さんが死のうと思って歩いていると、向こうで火を焚いてる人たちがいる。傍へ行って「火種をください」と火種をお願いすると、「やる」と。「やるからこいつを持っていけ」って、死体も渡されるんですね。お嫁さんは、その死体を背負って火種を貰って、それでも火種を絶やしちやいけないので、火種を囲炉裏で燃やして、死んだ人をどうしようかと思っていると、翌日、それが金の塊だったというように、大歳をはさんで死というものの影を民話は、繰り返しいろんな形で見せてくれるんですね。

「笠地蔵」の場合はそういうはっきりした形ではありません。けれども先程も言いましたように何も食べないで、寝てしまうというような言い方、こういうものに、一步踏み込めば、別の意味を汲み取っていくというものも秘めながら語っているのではないかという気がします。

【隣の爺婆—もう一人の自分】 そして最後に永浦さんのにだけ出てきた、隣の爺さん婆さんですね。でね、お気づきになったでしょうか。隣の爺さん婆さんの話になったとき、永浦さんの顔がにこっとなったでしょう。そしてなんかちょっと恥ずかしそうにしながら、「隣のおぼんつあんが、火い貰いにきたんだよ」と言いながら、隣の爺さん婆さんのことを言うときになると、語る人はちょっと雰囲気が変わってくるんです。すごく嬉しそうにくだけてきたり、それから恥ずかしそうにしたり、それから今までのお話とちょっと違うところへ行くよって合図みたいにしたり、表情を変えなされるんですね。そこが、非常におもしろいと思います。

それから、先程も言ったように必ず隣なんです。山際に一軒ボツンと住んでいるのかなあとすると、あら隣があったんだと思うんですね。少し離れたところに欲の深いお爺さんお婆さんがいてなんていうふうには絶対語らないで、民話は必ず隣にいるんですね。

この「隣」ということの意味ですけれども、あのう私は、これは私の推測の域ですが、隣の爺婆というのは語る人の心にある、もう一人の自分じゃないかと思うんですね。笠を被せて、身を捨て何も食べないで寝てしまう美しい爺さん婆さんいれば、宝物欲しくて、それを目的にして行って、良いもの欲しい良いものを欲しいという気持もあるということです。隣の爺婆の登場は、いつでも、その人のもう一つの自分。私たちだってそうですよ。そんなきれいごとばかりで生きてないですよ。人に親切にした一方で、ああ親切して

損したと思うときだってあるでしょう。

そういうふうには、人の心の中にある光と影のように、もう一つの自分があることをこうやってはにかみながら語るということは、私たちの先祖の知恵じゃないでしょうか。自分は立派な者だと言い切るのではなくて、立派な者だけじゃないようって。こういう気持だっちゃんとして潜んでいるんだよということを語りの中に込めながら、語ってくれるとき、隣の爺婆が生き活きとよみがえってきて、時には、やさしい方の爺さん婆さんよりも、聞いてて心に残ったりするんですね。隣の酷いお爺さんお婆さんの方がね。

【火の継承と命の連続】 そのようなときに、いつも火種を貰いにくるという形で現れるんです、隣の爺婆はね。「火っこ、たもれ」なんて言うてくるんですよ。そういうふうにして火が媒介になっている。

これも私の考えですけど、例えば「花咲か爺さん」の隣のお爺さんお婆さんは、ポチを殺してしまいますね。でもこっちのお爺さんお婆さんは、犬が殺されれば、それを埋める。埋めたところに木が生えれば、それで臼を作る。その臼が燃やされれば、その灰を貰ってくる、っていうふうには命の連続を心掛けているんですね。片方は、全部殺しちゃったり、割っちゃったり、燃やしちゃったりして踏みつぶしてしまう。この両方が、自分の心に潜む両面であることを、私たちの先祖は認識していたんだと思います。ですから、良いことばかりじゃない。隣の爺さん婆さんも、性懲りなくも登場させて物語をつくってきた。

【昔話の底の深さと語り】 こんなふうには考えていくと、昔話というものの底の深さを思わずにいられないし、しかも表立ってこうだこうだなんて一つも言わないで、全部それを潜ませながら、物語をつくっている。その凄さっていうのを思いますし、皆さんが語られるときに、ちょっとそのことに気づかれると、皆さんの言葉がちょっと違って来るような気がするんです。そして、そのちょっと違うことの積み重ねが、いい語りを生み出すし、いい再話を生み出していくんじゃないかなと考えております。

あの、ここらで私の話を一応終わらせていただいて、もし、質問などありましたら受けたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

記録 小野 津子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

7. みなさんと感想や意見の交換2

小田嶋—ありがとうございました。最初に皆さんに出していただいた様々な意見とか感想とか、いままでの笠地蔵での体験のお話と、今、小野先生に話題提供していただいたそのことが、とても何か結びついてくるようなそんな気がしています。どういう風に、今度、皆さんの感想や意見を交換させていこうかなと思ったんですけども、最初に出していただいたそうした意見に沿いながら問いかけていくといいかな、という気がしていたんですけども。

まず、話題提供の順番から言わせていただきますと、おじいさん、おばあさんという日本民話の中に常に出てくるおじいさん、おばあさんが二人だけで暮らしているということと、今まで皆さんが、笠地蔵の中で感じていられたおじいさん、おばあさんの貧しさとか、まあ、スゲ笠作るのに本当にそんな風になれるのか、そんなことに関連して、いろいろなこと、今まで聞いたり見たりした中で、何かぜひ言ってみたいこと、意見を述べてみたいことなどありましたら、出していただければなあと思いますが。

参加者 F (女性)—すみません。ちょっと、話を別な方向に持っていったらうんじやないかと心配しながらお話し申し上げますけど、あの、岩崎さんと瀬田さんの再話の中では、おじいさん、おばあさんたちのところへ、お地蔵さんたちがやってきて騒がしくなった時、お地蔵さんたちが「笠を持ってきてくれたおじいさんの家はどこだ、どこだ」と聞くところがありますね。それで、「ここだ、ここだ」って言うことをどちらとも言っていないんですけども、実際に伝承される方達は、そういう台詞がないように思います。それで、語っていいのかどうかわかんないんですけど、なんか、今までの小野先生のお話なんかでも、どちらかという、おじいさんおばあさんはひっそりと暮らすというような形でできていますので、あまり「ここだ、ここだ」と自己主張しないような気がするんですけど。「ここだ、ここだ」と再話の方達が言われているのはどういう意味なのかなとちょっと思いました。

小野—あの、永浦さんの語りではね、「おばあさん、おまえ行け」とか「おれはおっかないから、おじいさん行け」とかってけんかしちゃって、そして朝まで、誰もそれを見に行かなかったっていうふうに語られてあって、決して、唄が聞こえたからすぐ、「ここだ、ここだ」って言ってないんですよね。で、やっぱりそこは、再話者の考えっていうのもおかしいですけども、唄が聞こえてきたら、おじいさんとおばあさんが、「ここだ、ここだ」って言って招き寄せたっていう形をとろうとしたんじゃないでしょうかね。永浦さんのだけは、おばあさんとおじいさんが寝床でちょっとけんかみたいになってるんですよね。朝まで結局行かないで、朝、行ってみたら、そこにいろいろあったってなってますよね。

参加者 F—元々はそういう形だということですか。

小野—それはわかんないんですけど、元々あったのかもしれないですけどもね。でも、割に「ここだ、ここだ」ってすぐ言う話は、私たちはあんまり聞いてはいないですね。

参加者 F—ちょっと違和感を感じたものですから。ありがとうございました。

小野—いいものが来るのがわかっているみたいでね。予想してたみたいな気配があって。そこは、永浦さん

のはやっぱりちょっと違ってたと思います。

小田嶋—それについて。

加藤—それで、岩崎さんの教科書では、その「ここだ、ここだ」がいかにもこう、自分で招き寄せてるっていうので、今の教科書ではそこが抜いてあるんですね。そのように教科書も、部分部分で変遷していて、教えていて、「ここだ、ここだ」って、いかにも「くれ、くれ」みたいだからって、先生方の意見で、ずいぶん取られていたり、変わっているところが結構あります。今回は、一番最初の絵本でやりましたから、そのまま読みました。

小田嶋—ありがとうございます。やっぱり再話ということに深く関わる部分でもあるのかもしれないね。その辺りね。違和感を感じられていたんだということですね。ありがとうございます。

参加者 D—最初の時にね、子どもの時には最後にお地蔵さんがいっぱい持ってくる、その良さだけが記憶に残ってたけども、年取ると、なんか、物悲しい感じがするというのを伝えたんですけども、私の解釈は、意外と今、小野先生のお話を聞いて、案外はずれてなかったんだな。それはどういうことかと言うと、お地蔵さんがこちら側へ来るということは、なんか、お迎えが来たということになるのね、私の解釈だと。だから、物語の続きを作るとしたら、『翌朝、朝日が差し込んだ。新年、正月の日に、囲炉裏の側で、にこやかな顔をして穏やかな顔をして並んだ二人の死体があった』という解釈なんですよ。なんか、厳しい生活の中で、たまたまそこでお土産をもらったということでは、楽にはならないわけじゃないですか。そういうことを考えると、死のにおいというものはずっとつきまとっていて、子どもの頃には思われなかったんだけど、その奥深さが結局、人生をどうやって考えるかって言うと、昔の人は、どう死ぬかだと思っんです。往生際というか、どうしようかっていう死に様が大事だったんじゃないかな。魂があったんでないかなとそういった点で非常に美しいんだけど悲しい感情を味わえるようになったんだと、これは私の妄想的な解釈でもあるんですけども、そういうふうに思っていました。

小田嶋—本当に、最初に出されていたことと本当に噛み合ってくるというか、不思議に思います。ありがとうございます。あと、どなたか、いらっしゃいませんか。

参加者 G (女性)—この会を知ったのが、ほんの一週間前ぐらいで、お友達に小学校の読み聞かせ、手伝ってくれないかって言われて、かつえちゃんなら大丈夫じゃないって言われて、できるかなあと思いがら引き受けたのがきっかけで、この前、学校に行った時に、小学校の一年生のクラスに行って、初めてなので私は傍観者で見させていただいたんですけど、子ども達の生き生きした、やっぱり目線っていうか、そういうものに惹かれて、自分も一生懸命にやんなきゃいけないのかなという気持ちをもった時に、このチラシを目にしたんですね。それで、今日初めて来てみました。でも、なんかとっても奥深くって、なんか、そんなところまで考えているんだっていうのが、正直初めてなんですけど感想です。でも、今日、参加してみて、次回、また参加してみたいなっていう気持ちになりました。絵本を読むのは、まあ大丈夫できんじゃないみたいな感じで、軽く引き受けた自分がちょっと恥ずかしいんですけども、ちゃんと自分で読み込んで小学校の一、二年生に行ければいいなという感想をもちました。

小田嶋—ありがとうございます。

小野—本当に、語る人は、自分をどこかで磨いていけると思うんです。別に、それを子どもに全部伝えることはないけど、これにはこんな思いがあるんだなあなんて思いながら語ると、ひとあじ違ってくるんですね。そのひとあじが、ものすごく大事な気がするし、それはやりがいがあることだと思うんですね。ただ単に覚えて、右から左へ語るだけではなくて体をくぐらせながら出していかれると、すごくいいものになってくると思います。ありがとうございます。

小田嶋—ありがとうございます。先ほども触れたように、自分の体をくぐらせて語ることも、一つの再話ではないかなと考えますので、いろいろやってみてくださるといいなと思います。ありがとうございました。あと、みなさん、何かありますか。

小野—ちょっと、さっき説明が足りなかったので、加えさえていただいてもいいでしょうか。この資料の、浅野みねさんの語りの終わりなんですけども、お地蔵さんや笠の観音さまがいろいろ物を持ってきてくれますね。持ってきてくれるなかで、たいていは宝物とか、お金とか、味噌とか砂糖とかって、おじいさんおばあさんが作れない物が多いんですけど、岩崎京子さんのだけは、人参とか牛蒡とか大根も出てきましたが、そういうのはほとんど出て来ないんですね。

それで、浅野みねさんの語りでは、丸太を持ってきたっていうんです。大きな丸太ん棒をごろごろごろ転がしてきたっていうんです。で、その丸太の中に、宝が入っていたことになるんですけども、それをもらったおじいさんとおばあさんが、「焚くものがなかったから、お地蔵さんが焚き物もってきてくれた」って、喜ぶ下りがあったと思うんですけども、私はあるとき、「子どもの頃から貧しくて、手間取りにやられて、旦那どののところで働いて苦労した」っていう話をおじいさんから聞いたことがあります。「何が一番つらかったですか」って、聞いたんですよ。私はね、予想してたの。「お腹がすいた」っていうのがつらかったんじゃないかなと思ったら、「寒いのがつらかった」って。「食う物は、農村なんで、何かかんか、かじりついて食えた」っていうんです。でも、寒さ。「寒い部屋に一人置かれて、布団もなく、薄い物を着て、冬を過ごすあの寒さだけは、救うことができなかった」って言われて、びっくりしたことがあります。

それから、先だって、丸森の方で、山で木を切って過ごしてたっていう方のお話を聞いてた時に、山を、山の持ち主から買うんだそうです。こう、面積を。で、その買った面積の木を切ったりいろいろして、それを生活の糧にしてという話を伺っていたときに、「山を買えない人はどうするんですか」って聞いたら、「山を買えない人は、柴を刈るんだ」って。だから、年寄りで、お金もなくて、山を、材木を買えない人は、柴を刈る。そうすると、桃太郎さんで、「おじいさんは山へ柴刈りに」この言葉の重みがまた、違うと思うんですね。そして、柴を刈る人は、刈って積んでおいてはいけないんですって。「毎日、いるだけ刈ってこなけりゃいけないんだ」って、その方は私たちに教えてくださったんです。山の仕事の詳細を知らないと、山で柴刈るっていう言葉がわからないし、地蔵さまに丸太を貰って喜ぶおじいさんおばあさんのことを、変に思うかもしれないんですけども、そういう木についてもそういう思いなんですね。だから、何気なく置かれている、語られていることば一つ一つ、それは、語る人によっても出るんです。その語る人の生活感覚や受け止め方によっても変わってくる、そういう流動的なところも認識しながら、民話は理解していきたいと思って、ちょっと木のことを言いました。

小田嶋—ありがとうございます。今、寒さということが出てきましたけれど、やっぱり、野っ原に吹きざらしになっている地蔵さまっていうのは、本当に、まさに見るからに「おお、寒かろう、寒かろう」ってということばを掛けてしまう。そこには、地蔵さまが、ただ石の神さま仏さまではないんだってという話題提供がありましたけども、そうした地蔵さまへの思いについての、最初の疑問を出してくださった方があったように、その地蔵さまをめぐることについても、もし、何かご意見などありましたら。

参加者 H (男性) —あの、この前テレビを見てましたらですね、山元町で家族を亡くした、特にお子様を亡くした方々が、地蔵さまを粘土で作っているということが、ニュースでなされました。五年経つんでしょうかね。そういうことで、あの、誰かがそういうことを提案して、結構、みんなが作っておりました。その中でですね、「作っていくと、子どもの顔に似てくるんだよねえ」ということばがありました。そういうことが、民話とつながってくるのかなと思っておりました。

あと、先ほどの木の話がありますけども、私、富谷出身で、浅野みねさんが住んでいるところは、田んぼがずっと広いんですよ。それで、木がないんです。近くには木はないんです。それで、遠くの宮床の小野から買ってきて、木を使ってたんだという場所ですので、やはり、木の大切さというのは、すごく特別なことだなと思いました。以上です。

小田嶋—ありがとうございます。

参加者 I (女性) — 最初っからおもしろくて、どきどきしながら聞いていました。いろんなバージョンの笠地蔵をお聞きして、ああ、いろいろ違うんだなあってすごく思っていたんですけど、ひよっとしたら、ここは一つ、同じポイントかなって思った点があって、これをお聞きしたいんですけど、宝物や何かを持ってきた人なのか、お地蔵さまなのかわかんないけど、いた。そして、それが誰だったのか、たとえば、後ろ姿が見えたとか、足跡が見えたとかっていうのはあるんですけど、ああ、こんなのくれたんだと思ったら、追いかけて行かないんですか。あの、誰も追いかけてもしない、確認しようとしない。後ろ姿が見えたら、ああ、あの人達だと思って、追いかけてくるんじゃないかなと思ったんですけど、追いかけてないのはどうしてかなってずっと思っていました。で、いろんなお話をお聞きしながら、一つ思ったのは、なんか、わかんないけど、追いかけてちゃいけないんじゃないかなという気がしたということがあります。

あと、もう一つ、話が横に逸れちゃうんですけど、最後、食べ物とかおいしい物をたくさんいただくっていうのを、たまたま、私、ちょっと仕事の都合で聖書を読む機会が結構あるんですけど、「丘の上のお説教で、ちょびっとだけの食べ物をキリストがなんで、分けたのか」っていうのがあって、なんかそのことを思い出しながら、あのキリストの話聞く人たちって、本当にお金無くて、食べるもの無くて、でも、話は聞きたいって来てる人たちだということでした。だから、そこで、食べるものがたくさんもらえるって奇跡だって、なんとかの福音書を持ってたっていうお話を思い出しました。これは、あの、二つ目の方は質問ではなくて、ちょっと感想のようなものです。

小田嶋—ありがとうございます。なるほど、と思ったのは、「なぜ、追いかけてなかったのか」っていう問いかけなんです。それについて、何かご意見がある方はいらっしゃいますか。その、去って行った後ろ姿は何だったのかっていうことなんではないかと思うんですけども。これは、お地蔵さまをめぐる問題でもあるんだと思いますが。

小野—そうですね、追いかけてって、くれた人を確認するっていうことにほとんど意味がなかったんだと思うんですね。話の中でね。追いかけて行ったところ、どの人がくれたんだっていうことを確認するっていうことに話のウエイトを置かなかったんだと思います。誰かはわからないけど、その人達がいい物をどっさり置いてってくれたということで、余韻を残したんではないでしょうかね。返事にならないかもしれませんが、ごめんなさいね。

小田嶋—お話のバリエーションでも、姿の見えないお話もありますよね。音だけ聞こえて、どさ一んと物が届いたんだけど、その姿は見ないでしまったとか、声だけ聞こえたとか。地蔵さまの姿が見えるっていう話ばかりではないみたいですね。

あと、そのほかのことでもいいんですけど、おじいさんおばあさんのこと、地蔵さまのこと、それを含めて今度は、最初にとっても深い問いといたしますか、貧乏と幸せの関係っていうこととか、祈りとか救いの問題っていうことが出てきましたけれども、そうした方面なども何か、感じられたことがありましたら。

参加者J(男性)—永浦さんの話で、人のまねはするものでないっていう、これがものすごく私には、深い印象がいたしました。これがやっぱり一つの教訓で、永浦さんの中では教訓で、従って私たちは、お地蔵さんを見て、肩にかついでいるのを見て、では、どうすればいいのか、それは、それぞれの人が、永浦さんの話では観音さま、地蔵さまや観音さまが信仰を名乗って、貧乏でもおすがりしよう、とそういうところかに教訓があるのかなと思います。

小田嶋—ありがとうございます。永浦さんのお話で、地蔵さまに笠をかぶせ申した時のおじいさんおばあさんの、その行為に対する気持ちみたいなものは少し、違っていたんじゃないでしょうかね。地蔵さまがかわいそうでしかたなくてかぶせたのと、その見返りを期待してかぶせたのと、それがまねするものでないという教訓の背後にあるのかな、と私は考えました。

あと、ほかに、みなさま、何かありましたら。

参加者K(女性)—あの、地蔵さまの行いだったら、そういうのから少し離れるかもしれないんですけども、私自身の小さいときからの生活の中で、子どもにはよくわからない大人達の動きの中から、私たちには知らない何かを、うちの母もやってたようで、それで、思わぬところで、思いがけない、良かったなあという思いを、たびたびさせて貰うことがあるんですね。だから、そういうところで、誰かわからない人たちの力で、いろんなところで助けられたり恵まれたりすることから、なんか、日常の生活の中で、お地蔵さまでも神さまでもなんでもないんだけど、なんか自然に、「ありがとうございます」ということばを言いたくなったりするんですね。子どもが遠くに離れて生活するようになった時でも、なんか知らないけど、「こちらのことは私たちが守ります」というそんな風に言っていた。そういう思いを度々していると、大人達が、子ども達には理解できないところで誰かに何か授けたりしたものが、巡り巡って、これをすればこうなるよって聞いたこともないけども、いろんなことがあるたびに、ああ、上の人達がいろんな力をくれたんだなっていう思いを感じたりすることがあるんです。だから、さっきのどなたかのお話にもありましたけど、置いていってくださった方を追いかけてたりしないっていうのも、自分が感じてきたものと一緒かも何となく感じながら、笠地蔵を聞いたり、お話のやりとりを聞かせて

もらったりしました。

小田嶋—ありがとうございます。とってもいいご意見をいただいて。巡ってくる福みたいなものは、世界のどこかで、誰かがしてくれた善意のものが巡り巡ってやってきてくれているんだという感謝というか、世界に向かっての感謝みたいな、そんなものでしょうかねえ。ありがとうございます。

参加者E—永浦さんの語りって言うのは、一番感動しました。今日。やっぱりすごいですね。すばらしい。やっぱりこういう人が、語り継いでくださるから、我々も考えさせられるんじゃないですかね。そういうところがあるんだ、そう思いますね。

で、私はやっぱりこういう会が、さっきもおっしゃったけれども、つながりで行くんじゃないかと。新しい形でね。小学校の教科書にあるっていうけれども、そこからみ出して、もっともつと色々なところで、こういうところとかで、お話ができる、語るっていうかね。あの、語るっていうのは、ここ（メディアテーク）で、いろいろ「語りの力」とか聞いたんだけど、いろんな解釈があるらしくって、馬偏に扁って書いて、「騙る」っていうのがあるでしょ。そういうのが語源だって言う話から始まったんだよね。で、次に「かたる」っていうのうまくいかなかった気がしますね。どういう意味なんかね。

私は、語るっていうのは、集まってああでもない、こうでもないと考えることだろうと思います。小野さんもおっしゃったけれども「かだれなぐされてしまう」っていうのは、「かだる」っていうのは、話してもらえないのと、仲間に入れてもらえないっていうのと、「まぜて」って言うことばがあるでしょ。東北地方には、それだと思うんだねえ。あの、米偏に柔らかいという字で、^{かてめし}糎飯ってことばがありますね。だから、みんな集まって、ああでもない、こうでもないって考えるっていう考える力、考える持続力っていうか、そういうのがとっても大事なんじゃないかと思いました。特に、小野さんの解説っていうか、解釈ですね。ことばを解釈する、そういうのを聞いて、ほぼ、なるほどと思いましたけど、自分と考えが違うなっていうところもないことはなかったような気がして、また、考え直したいなあ、とそういう風に思います。思っています。

とにかく、永浦さんの話っていうのは、これで見せて貰って、こういうのが「語り」っていうか、「民話の語り」っていうか、小野さんが「二百いくつ、話をしてもらったけど、一言一句違わない」っていうのは、やっぱり伝統あったんじゃないですかね。日本のあの、語り部っていう部があるんじゃないかと思いますね。それは一つの能力っていうか、私たちが、小野さんもおっしゃったけど、無形文化財として大切に大切に守っていかなければいけない、そういうお話だと思うんですね。

あの、ちょっと本を、並んでるのを見せて貰ったけど、とにかく嬉しいのは、各々、話が非常に短い、これはね、やっぱり日本人の才能だと思いますね。本当に短い話で、相手を完全にねじ伏せてしまうのね。話の伝統だと私は思いますね。長くなるからやめます。

小田嶋—ありがとうございます。その短いお話の中に、話題提供していただいたように、深い意味とか思いとか、そうしたものが込められているということに、その民話のすごさというものがあるんじゃないかなと思います。

で、今も話していただきましたけれども、今、三回目を迎えましたこの「民話ゆうわ座」のあり方とか進め方についても、もしご意見などがありましたら、それも出していただけたらなあと思うんですが、いかがでしょうか。

参加者 L (女性) —大変楽しくお話聞かせていただきました。笠地蔵をこんなに深く考えたことがなかったので、とても楽しかったです。岩崎さんの「かさこじぞう」があまりにも有名になってまして、私、この会に来る前にちょっとだけ、小沢俊夫さんの再話で山梨のだったと思うんですけど、「笠地蔵」を読んで来たんですね。その「笠地蔵」の終わりは、笠のないお地蔵さんをおうちに連れてきて大事にしてたら、鼻からお米が溢れてきて、ちょっと欲張りなおばあさんが鼻をほじったら、鼻から出なくなっただけという話で終わってたんですよ。今回のお話をしてくれた方もとってもまじめな語りですてきだし、松谷さんのもすてきだし、瀬田貞二さんのもすてきなんだけど、そういった、まだまだ私たちの知らない笠地蔵もあるのかもしれないと思ってまして、そういった、なんていうんですか、今回はとても深く掘り下げていただいてとても楽しかったですけども、広く、なんか、こんなおもしろい話もあるよっていうのも楽しいかなと思って聞いておりました。すみません、余計なことだけど。

小田嶋—ありがとうございます。あの、今、出てきたおもしろい笠地蔵さん。お地蔵さん进行きそうだと行って、拾ってきて、大事に大切にいて、暖かくしてあげたら、鼻の穴から米がぼろぼろ出てきたって言う、絵本がありますね。実はこれは宮城県にもあるんです。永浦さんもそうだし、永浦さんと同じ伝承の筋道をもつ伊藤正子さんのお話にもあって、「みやぎ民話の会叢書」のなかにも取られていますので。実は、笠地蔵と言っても、本当にバリエーションがなくて、本当にまじめなおじいさんおばあさんだけじゃなかったりするし、そうした風にお話ってとっても楽しくて面白くて、深く考えると、とっても深いんだけど、楽しんで話すこともできるという。だから、みなさんが語りをされるときには、さまざまなお話にも挑戦していただけると、語りを聞いてくれる子ども達もすごく楽しいんじゃないかなと思います。ありがとうございます。

参加者 M (女性) —ええと、今日は、関東の方から、東京から来て参加させていただいたんですけども、ありがとうございます。一言申し上げたいのは、「みやぎの方はいいなあ」、本当に羨ましいと思います。小野先生もそうだし、みやぎ民話の会が本当にいい活動をしていらっしゃることに、私たちは羨望のまなざしです。本当にこれからもいろいろと学ばせていただきたいと思っておりますので、宮城、仙台近辺の方達ね、本当に自分たちは宝物を持っているっていうこと、宝物って失礼ですけどね、本当にいい場をもっていらっしゃるっていうことをね、幸せだと思っで新年をお迎えてください。本当に、また参加させていただきますので、ありがとうございます。よろしくお願ひします。

小田嶋—また、どうぞいらしてください。ありがとうございます。もう、ないですかね。よろしいですか。

参加者 N (女性) —すみません。私も最初にお話しされた加藤さんと同じで、長年、小学校の教員をしていました。それで、何回か教科書で、岩崎さんの「かさこじぞう」を取り上げて教科書を使って授業をしましたし、オペレッタのような形で子ども達と遊んだり、岩崎さんの作品の中のことばが、結構子ども達に「つめたかろうのう」とか入りやすいものですから、子ども達もおじいさんおばあさんの優しさとか、お地蔵さまにいいものたくさん貰ってめでたくお正月を迎えられたっていうことが、ほのぼのとしていて、子ども達と一緒に楽しく授業をしたんですけども、やっぱり、これだけいろんな話があって、深みがあるっていうことを、もっともっと早くに知らなければならぬところだったんですけども、今日、改めて感じることができました。

それで、年の暮れで、今日、何人集まるかしらって、小野先生は「十人集まればいいのよ」ってお話し

やってたんですが、こんなにたくさんの方が集まってくださって、みんなでいろんなことを考えていけたんですけども、やっぱり子ども達にもっともっといろんな形で伝えて行く必要があると思います。もちろん岩崎さんの絵本を読んでやったり教科書で勉強してもいいと思うんですが、そのほかにももっともっといろんなものがあるんだっていうことを、今日お集まりのみなさんは、きっといろんな意味で子ども達とかに触れていらっしゃる方が多いんじゃないかと思うんですが、努めてそういう語る場を作っていくっていうことを、私も含めて一生懸命にやっていきたいと感じましたので、一言、最後にお話しさせていただきました。

小田嶋—ありがとうございます。あの、このゆうわ座もそういう語りの場につながるような語りの場でありたいなど、これからもそんな風にして行きたいなと思います。

この辺りで終わらせていただきたいのですが、実は、ずっと、この話し合いのたいへんなまとめと板書をしてくださったのが、こちらにいる瀬尾夏美さんです。（拍手）後で、メディアテークの方から紹介があるかと思うんですが、瀬尾さんと、撮影をしてくださっている小森はるかさんの展示が、今、七階で行われていますので、そちらももし、お時間があるときには見ていただければなあと思います。まだ、この方々の展示はあちこちであるそうなので。

小野—この方達は、三月十一日以降、陸前高田に住みついて、芸大の学生さんだったんですけども、卒業されましたけども、そこを拠点にしながら、新しい創造活動に意欲的に取り組もうとしておられます。その方々の活動の一端を、七階で展示をやっておりますので、どうぞ見てください。今日でなくても、来年の二月の末までやっているそうですから。どうぞ、見て励ましていただければと思います。（拍手）

清水—ありがとうございました。皆さんも、最初は三時間とすごくびっくりしながらここに座ってくださったんじゃないかと思いますが、多分、あつという間だったなと感じていらっしゃるんじゃないかと思います。みやぎ民話の会の方々、実はですね、このプログラムを五月からずっとずっと準備を重ねて、これは年に一回しかできないということで、今日までずっと練って、今日を迎えました。改めて、民話の会のみなさんにも拍手を贈っていただければと思います。（拍手）

それから、みなさんも、三時間、ひたすら聞き手でいらっしゃるだけでなく、前半からすごく活発にというか、率直に、素直に自分の気持ちをこの場にぶつけてくださったなあと思って、最初から、私たちも、どういう風に進行していくだろうかっていうのを、予想がつかない部分もあったんですけども、皆さんによって深めていただいた部分もあったなあと改めて思います。みなさん、三時間どうもありがとうございました。（拍手）

みやぎ民話の会さんとメディアテークは、震災の後、ずっと五年目に入りますけども、一緒に活動してきました。民話の会さんの四十五年の活動に対して、私たちは全然、何も及ぶところがなくて、一生懸命学びながら併走させていただいているところなのですが、今、民話の会さんと共同です、伝承の語り手の方の映像をまとめたDVDを、それを民話の会さんが、冒頭でもお話してくださっていたように、ぜひこちらに住んでいらっしゃるみなさんの財産として広く見ていただきたいということで、DVDにしたものを、2階に映像・音響ライブラリーというところがあるのですが、そこで公開しています。で、永浦さんのもある

んですけども、それ以外にも、ここに来ていらっしゃる佐々木健さんのも、伊藤正子さん、曾根つき子さん、佐藤玲子さんの五名の語り手の全部で十四本のDVDが二階のライブラリーに並んでいます。こちら、貸し出しができたり、館内で視聴ができてしますので、ぜひ、そちらにもご関心をいただければと思います。

それから、今日、再話という話を聞いて、やっぱりその話自体は生き物みたいに、どの人の生きた体をくぐるかで、いかようにも変化するんだなというのをすごく感じました。生きた体っていうのは、やっぱりその人の人生を背負ってるものでもあるので、同じ話でもこんなふうに表示方が違うんだなということを改めて、一緒にいろんな方を見ていくことで、感じていただけたんじゃないかなと思います。みやぎ民話の会さんは、実は、叢書といって、永浦さんのもそうなんですけども、お一人一冊ずつで、語り手の方一冊ずつの人生に寄り添うような形で民話を編集して本を作ってもらっています。で、その最新版が、「みやぎ民話の会叢書十四集」で、『語りたい こんな民話』っていうことで、これは再話がここにいらっしゃる小野和子さん。だから、小野さんの体を通して出てきた話っていうのがこの本にまとまっていると思います。これがですね、この奥に本屋さんというか、ショップがあるんですけども、税込み1,000円で販売していますので、ぜひ、年越しをこの本と一緒に迎えるのは最高なんじゃないかなと思いますので、そちらも、ご関心いただければと思います。

メディアテークは、いろいろ民話の会さんに協力していただきながら、様々なイベントを行っているんですけど、今、六階で「物語りのかたち」という展覧会を開催しています。ここでも、民話の会さんが聞き取って来られた映像も紹介していますし、さらにそこからインスピレーションを受けてというか、さまざまな若手の作家が、民話を形に表すということに挑戦している展覧会が、年内は明日まで開催しています。今日も、夜、八時まで見ていただけますので、そちらもぜひ足をお運びいただければと思います。長くなりました。いろいろ宣伝ばかりで申し訳ございませんでした。それでは、みなさん、良いお年をお迎えください。ありがとうございました。

小野—ありがとうございました。みなさんと共に歩いていくことができばうれしいと思います。良いお年を。（拍手）

佐々木健—

♪とーんび、とんび、とんび

まーれ、まれ、まれ

男だったら、刀っこけっから

まーれ、まれ、まれ

♪とーんび、とんび、とんび

まーれ、まれ、まれ

男だったら、ふんどしっこけっから

まーれ、まれ、まれ

以上でございます。どうもありがとうございます。

小野—今、唄っていただいた方は、大変な語り手でいらっしゃるんです。今日は、語っていただく機会がありませんでしたけどね。

清水一あの、佐々木健さんの語りは、六階の展示室でも見ていただけますし、DVDも二階で配架しておりますので、ぜひ、そちらもご覧ください。ありがとうございました。

記録 島津 信子(みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

—以上—